

作業ポリシー

- 映画【ヤマトよ永遠に】の実際の映像に存在する全台詞を収録して、その内容を全て肯定する
- 全台詞にはナレーションが含まれる
- ナレーションに対応する発話するキャラクターが存在しないので、語り部エヌというナレーション担当のキャラクターを創設する
- 全台詞にはガヤ、不明瞭な叫び声などは含まれない可能性がある
- 実際の映像に収録されないカットシーンの存在は無かったことにして考える（従って準備稿とは異なる解釈を取る）
- 空間に浮かび上がるスターシャ、オレンジの人などは実際に見える存在であると考え
- できるだけ物語がスムーズに流れるように随時文言を追加する（ただし既存の台詞の変更は行わない）
- 特に以下の事項には合理的な理由を与える【真田が事前にハイペロン爆弾を知っていた】【暗黒側がヤマトの発進を記録していた】【地球人が中性子爆弾を知らない】【アルフォンが古代は死んだという】【サーシャが偽地球に残る】【古代守が自爆可能である】【暗黒星団帝国がヤマトとあまり本気で戦っていない】【偽地球で本気でヤマト乗組員を騙そうとしていない】【山南が自分を部品だという】【敵母星なのに事実上二人しかいない】

内容

ヤマトよ永遠に 2017 【第三稿】	1
作業ポリシー	1
プロローグ 語部	2

第1章 奇襲	3
第2章 出撃	28
第3章 航海	54
第4章 母星	83
第5章 推理	102
エピソード 永遠	114
解説	114
宣伝	117

プロローグ 語部

子供達は待っていた。

語り部エヌの登場を待っていた。

エヌとはナレーターの頭文字のNだとも、世界を生み出す万能なる人物の頭文字のNだとも噂された。

まさか、あのNのことかと言われる場合もあったが、それは勘違いであった。彼はNの姓を継承した養子に過ぎないからだ。

しかし、子供達には関係なかった。

彼らは面白い話を語るエヌの登場だけを待っていたのだ。

スポットライトが壇上に当たった。

そこには一人の老人が座っていた。

エヌだった。

エヌは前置き無しに物語を語り始めた。

「無限にひろがる大宇宙。この無数の星々のきらめきの中に、さまざまな生命が充ち満ちている。そして、この生命の息吹きは時に宇宙の平和を乱すことがある。地球を包むこの大宇宙の一部でもいくつかの戦いが起こっては終わった。あのガミラスや白色彗星帝国、謎の自動惑星ゴルバとの戦いも、ヤマトの活躍によって終結し、地球は今平和な営みを取り戻したかに見える……時に西暦二二〇二年」

第1章 奇襲

真田は当惑していた。

それはそうだ。

姉を事故で失い、手足が義手義足の真田は、仕事に不自由を感じないレベルで動ける人間としては、最大級に不幸な人間であるはずだった。

だが、目の前にある現実はそれを上回っていた。

目の前にいる旧友、古代守は首から下が全て機械だった。

「まさかこれほどとは」

「人工皮膚を付けていれば普通の人間に見える。今はお前にだけ告白するつもりで人工皮膚も取り外した」古代守は説明した。

「これはイスカンドルの技術か？」

「そうだ」

「こうしなければ、おまえの命は救えなかったのか？」

「その通りだ」

「オレに、そんな秘密を明かして何が望みだ」

「真田の義手義足には爆弾が組み込まれていると聞いた。同じものをオレの身体にも組み込めないだろうか」

「何を言うんだ。義手義足なら外して爆破もできるが、身体そのものは外せないのだぞ」

「分かっている」

「ならいったい何のために」

「イスカンドル人は死んでも死なない。意識は宇宙に残って自分の姿を投影できる。オレも同じ技術の対象になっているから、死んでも意識は残る。そして語りかけることもできる」

「かつてスターシャがそうしたようにか？」

「そうだ」

「だから、死んでも良いというのか？」

「まさか。死ぬのはあくまで避けられない時だ。しかし爆弾を埋めこむことで切り札は持ちたいのだ。ただで死ぬつもりはない」

「なるほど。スターシャは暗黒星団帝国の振る舞いに腹を立ててイスカ
ンダルを自爆させた。あれがスターシャの切り札ということか。だが肉体
は滅んでも精神は滅んでいなかった」

「真田にはお見通しだな。スターシャと同じように自分にも切り札が欲
しい。もちろん、天体を自爆させるほど大きな切り札を望んでいるわけ
ではない」

「わかった。爆弾を組み込む余地があるか、あとで検査してみよう」

「助かる」

「だが、一つ疑問が出てきた。そんな身体で子供が作れるのか？」

守は苦笑した。「一番の核心に切り込んできたな」

「……ということは、まさか」

「イスカンダルには、いくつかの人造人間のモデルが存在する。スター
シャとは、指揮官型人造人間のモデル名なのだ。そして、サーシャとはス
ターシャの妹にして実働部隊となる人造人間のモデル名なのだ」

「まさか、おまえの娘のサーシャというのは……」

「厳密に言えばサーシャモデルに、可能な限りスターシャとオレの遺伝
子を組み込んだものだ」

「どの程度の割合で自分の娘だと主張できるのだ？」

「サーシャモデルの遺伝子が五割、オレの遺伝子が三割。スターシャの
遺伝子が二割と言ったところだな」

「それでも子への愛を持てるのか？」

「三割はオレの子だ。一般人でも五割だから少なすぎる数字というわけ
でもない」

「なるほど」

「そのようなわけで、おそらくサーシャは約一年で成人するだろう。実
働部隊用として消耗品前提のサーシャモデルはそうように遺伝子が設計さ
れているからだ。だが、そのことはサーシャには言わないでおこうと思う。
あくまでイスカンダル人は一年で成人するとだけ伝えたいと思う」

「消耗品前提の実働部隊モデルと伝えない理由は？」

「少なくとも半分は消耗品ではなく我々の子だからだ」

「確かに一理ある」

「それに、イスカンドル人もサーシャモデルも、既に娘以外に残ってはいない。真実に気づいてしまう可能性は恐らくないだろう」

「死んだイスカンドル人が空間に投影されて語りかけない限りは……か」

「そうだ。スターシャは積極的な関与をしばらく手控えると言っているし、他のイスカンドル人は興味も示していない。おそらく大丈夫だろう」

「なるほど」

その時、男の声が響いた。「残念ながら、その見通しはまだ不完全だ」

「誰だ?」真田と守はあたりを見回した。だが誰もいなかった。

「姿を見せられない非礼を許してくれ。我々は遠い昔にイスカンドルを出たイスカンドル人の末裔だが、死者の意識を保存して語りかける技術を持っているだけで、空間に身体を投影する技術は持っていないのだ」

「誰だ」守が叫んだ。

「私は、グレート・エンペラー。暗黒星団帝国の指導者だ。イスカンドルを破壊する切っ掛けを作った自動惑星ゴルバを派遣させた男と言えば分かりやすいだろう」

「地球、ガミラス、イスカンドルの敵……」真田は呟いた。

「その通り。イスカンドルを巡る戦いでは確かに敵対した。しかし、その話はここでは横に置いて欲しい」

「都合が良すぎる話だな」

「それは分かっている」

「では、その話を横に置いて何が言いたい」

「サーシャモデルの前に存在した人造人間の設計データが存在した。これをサーダモデルという」

「聞いたことがない」守は言った。

「そうだろう。イスカンドルでは時代遅れとなって製造もされていない忘れられた存在だ。しかし、暗黒星団帝国ではまだ継承されていて製造される場合がある」

「サーシャが他のサーシャモデルと出会う可能性は無いが、サーダモデルと出会ってしまう可能性はあるというのか？」

「そうだ」

「今、暗黒星団帝国にサーダモデルは存在するのか？」

「我々の暗黒星団帝国では存在しない。しかし、向こうの暗黒星団帝国にはおそらく存在する。聖総統の側近のサーダという女性がどう見ても名前といい外見といいサーダモデルだ」

「待て」と真田はそこで口を挟んだ。「暗黒星団帝国は二つあるのか？」

「そうだ。イスカandalから旅立ったときは一つだったが、拡張するうちに分裂して東暗黒星団帝国と、西暗黒星団帝国に別れたのだ」

「グレート・エンペラーが支配するのはどちらだ？」

「西暗黒星団帝国だ」

「では東暗黒星団帝国は？」

「聖総統スカルダートが支配している」

「現在地球の主力艦隊はこのあたりに展開して暗黒星団帝国の侵攻を警戒している。この向きにあるのはどちらだ？」

「我々の西暗黒星団帝国だ。東暗黒星団帝国に対してはがら空きの布陣だな」

真田は考え込んだ。

「東暗黒星団帝国が地球を侵攻する可能性はあると思うかね？」

「今のところはない。西暗黒星団帝国も地球に侵攻する可能性はない」

「理由は？」

「相互の国境紛争の戦いに忙しいからだ」

「なるほど。警戒防衛ラインは全くの無駄か」

「話を戻していいかね？」

「ああ、割りこんで済まなかった」真田は見えないグレート・エンペラーに詫びた。

「話を戻すと、君たちの娘がサーダモデルの存在を知ってしまう可能性はあると思うべきだ」

「東暗黒星団帝国が地球を侵攻する可能性が無いなら、会う機会も無いのでは？」守は言った。

「愚鈍だな」グレート・エンペラーが笑った。

守はムツとした。

「古代。彼が言いたいのはこういうことだ」と真田は説明した。「たとえば会わないとしても、聖総統スカルダートの側近女性についての情報が地球に伝わってしまう可能性があり、その情報をサーシャが見てしまう可能性は否定できないわけだ」

「さすがは真田。地球を代表する頭脳だな」

「そこまで自惚れてはいないし、そもそもイカルス天文台に島流しになっている時点で地球代表にはほど遠いよ」

「優秀過ぎるので島流しにされているのだよ」

「では、地球侵攻を狙っていない西暗黒星団帝国の指導者がなぜここで会話に参加している」

「西暗黒星団帝国の指導者として来たわけではない」

「ほう？」

「サーシャモデルに使用されている遺伝子は複数のイスカンドル人遺伝子の合成モデルだ。そのうちの数パーセントの遺伝子を提供したのはまだ肉体を持っていた頃の私だ。そして、現在スターシャと古代守の娘としてそこに眠っている赤ん坊の遺伝子の一部も私のものだという疑いが出てきた。もし許可を頂けるなら遺伝子検査を行って頂きたい」

真田と守は予想外の話の成り行きに顔を見合わせた。

「私には検査を行う手もない。検査は真田の手で行って欲しい。これなら不安は無いだろう」グレート・エンペラーはそう告げた。

「どうする。守」

「検査を頼む。オレも自分の娘が何からできているのか可能な限り知りたい」

検査の結果は陽性だった。

つまり、グレート・エンペラーの遺伝子が赤ん坊には二パーセント含ま

れていたのだ。

たかが二パーセントとはいえ、事態は深刻だった。

何しろ、間接的とはいえ赤ん坊の母親の命を奪った張本人が赤ん坊の遺伝子提供者の一人だったのだ。それを知ればスターシャも平静ではいられないだろうが、古代守もまた自分以外の父親の存在に、平静ではいられなかった。

イカルス我真田の部屋に、赤ん坊の遺伝子提供者が集まった。つまり、自分の幻を投影したスターシャ、姿無きグレート・エンペラー、そして古代守が集まった。他の遺伝子提供者はイスカンダル崩壊に伴って資料が散逸して不明だった。

「スターシャは自分の姿を投影できるが私はできない。我々がイスカンダルを出た後で確立した技術だからだ。羨ましい」グレート・エンペラーはため息を付いた。

「しかし、もうイスカンダルはありません」とスターシャは冷たく言い切った。「あなたの責任です。あなたは、イスカンダルが戦争のためにいかなる資源も提供しないことは知っていたはずです」

「そのイスカンダルのルールを厳守する力は既に存在しないはずだった」

「自動惑星ゴルバで押し切れれば建前は崩れると思っていましたか？」

「その通りだ。惑星を自爆させてまで抵抗するとは思わなかった」

真田は守に囁いた。「我々の目の前で死者が会話している。凄いことだな。しかも敵対関係にあった国家元首二人だ」

「それを言ったら、オレだってほとんど死んでいるようなものだ。首から下は全て作り物なんだからな」

「では私も手足は死者だ」真田は前に踏み出した。「お二人に話があります」

「なんでしょう？」スターシャは真田の方を見た。

「聞こう」姿のないグレート・エンペラーも返事をした。

「イスカンダルと自分の肉体を失ったスターシャも、自動惑星ゴルバを

失いイスカンダリウム入手にも失敗した暗黒星団帝国、失礼、西暗黒星団帝国でしたね。両者は痛み分けと考えて良いのではないのでしょうか。言い争って今更どうにかなる話とも思えません。イスカンドルは崩壊し、イスカンダリウムも得られません」

「一理はある」とグレート・エンペラーは同意した。

「あなたはどうすればよろしいとお考えですか？」

「サーシャが成人するまでの一時休戦、というのはいかがでしょう」真田は言った。「幸い、ここにいるスターシャ、古代守、グレート・エンペラー。全員がサーシャに大なり小なり遺伝子を提供している。子供を守るための一時休戦なら同意は可能だと考えますが」

「賛成します」スターシャがすぐに同意した。

「オレも無論だ」古代守も賛成した。

「西暗黒星団帝国代表として地球連邦とは絶対に事を構えない……とは約束できない。だが、一人の父親としてスターシャ、古代守とは争わないという約束なら可能だ」

「皆さんありがとう」

「ただ1つだけ補足事項がある」グレート・エンペラーは言った。

「なんでしょう」

「地球人は約二十年で成人するというが事実か？」

「地域や文化によってバラツキはありますが、おおむね二十年前後です」

「だが、サーシャモデルは約一年で成人する」

「そうらしいですな」

「その後約一年の間成人の姿で過ごし、そのあと寿命が尽きて死ぬ」

「その通りです」とスターシャも言った。「私と守の娘も、欠落遺伝子の多くをサーシャモデルの遺伝子で補いました。おそらくはそういう寿命になるでしょう」

「古代。おまえは知っていたのか？」真田は振り返った。

「ああ。だから、サーシャは役目を果たして死ぬ必要がある。肉体を滅ぼして意識を残せば不死だからだ」

「分かった。休戦は一年から二年といったところだな」真田はうなずいた。「しかし、これではサーシャを地球で育てるのは難しいぞ」

「なぜですか？」スターシャが質問した。

「急速に大きくなる子供を見たら怖れる地球人はおそらく多い」

「では、この小惑星で育てれば良いのでは？」

「古代守は既に地球防衛基地指令の辞令を受け取っていて、ここで子育てをしているわけには行かない」

「では真田。あなたが育てなさい」

「独身の私が子供？ それも不自然だ」

「いいじゃないか」と古代守が背中を叩いた。「姪とでも言っておけよ。それに、サーシャを育ててくれたら、おまえが考えていた宇宙戦艦ヤマト改造計画も後押ししてやる」

「古代……」

「それにな」

「なんだよ」

「オレが自爆するとき、サーシャを巻き込みたくない。遠くに置くに限る」

「自爆を前提に考えるなんて、おまえらしくもない」

「悪い。ちょっと考えすぎた」

だが話は転がり始めた。

サーシャは真田の姪、真田滯として真田が小惑星イカルスで育てることになった。

そして、藤堂長官の地球最終防衛線構想と、真田の宇宙戦艦ヤマト改造計画が相乗りし、藤堂長官は宇宙戦艦ヤマトを真田に預けることになった。もちろん、古代守の口添えがあつてのことだった。

藤堂長官の地球最終防衛線構想は、有事の際に奇襲反撃するために戦力を秘匿して太陽系に隠し置くものだった。イカルスにヤマトを隠すという構想はその点で藤堂長官の構想に合致した。旧式艦の宇宙戦艦ヤマトであれば、現役を外れていても奇異に思われないで済む。また、イカルスの宇

宙戦士訓練学校の教材という名目でイカルスに送り込んでもおかしな話ではなかった。

一方で真田が考えていたのは、暗黒星団帝国への反撃能力の獲得だ。連続ワープで暗黒星団帝国の母星への往復を可能とする波動エンジン、自動惑星ゴルバに対抗できると期待される新波動砲、連発できない波動砲を補うために用意された波動カートリッジ弾などが改造の目玉だった。

イカルスのドックで徐々に改造を加えていくのであれば、藤堂の思惑も真田の思惑も満たしうるものだった。

残された問題は、暗黒星団帝国の母星がどこにあるのかはっきりと分かっていないことだけだった。しかも、暗黒星団帝国は二つあるという事実が発覚してからは、問題も二つに増えた。

ある日、仕事と子育てを終えた真田のところにグレート・エンペラーが訪問してきた。

「お疲れのところ申し訳ないが、一つ意見を聞きたいことが出てきた」

「意見を述べる忠臣なら何人でもいるでしょう」真田は答えた。

「残念ながら、彼らでも分からなかった」

「では、あまり期待しないで下さい」

「異人種である真田なら違うことを言ってくれそうな気がするのだ」

「ならば聞きましょう」

「東暗黒星団帝国では、最近ハイペロン爆弾を製造しているという」

「ハイペロン爆弾、聞かない名だな」

「大元はイスカンドルの技術がベースになっている。似た技術が我々にも継承されているが効果が薄いので製造しようという機運になったことはない」

「どのような効果でしょう」

「これが惑星上で爆発すると、惑星上の中間子質量が破壊され、一瞬のうち人間の脳細胞が破壊されて全滅する」

「殲滅兵器ですな」

「しかし、数万の惑星を要する大帝国相手に使うのは威力が小さすぎる

のだ」

「確かに」

「真田はどう思う？」

「地球にもかつて中性子爆弾という爆弾があり、建物は壊さず人だけを殺す効果を持っていた。あまりに非人道的ということで製造が禁止されて久しいので、覚えている者は滅多にいないがね」

「中性子爆弾が製造された目的は何だね？」

「人だけ殺して直接交戦せずに占領するためです」

「では、ハイペロン爆弾製造の目的も同じだろうか」

「占領されると不味い惑星は西暗黒星団帝国にありますか？」

「特にないな。全ての惑星は互いに役割を分割するようになっていて、どの惑星が失われても問題は無いように運営されている」

「では、西暗黒星団帝国とは別に使用目的があるのでしょうか」

「どこだね？」

「そこまでは分かりません」

「地球が目標ということはあり得ないかね？」

「西暗黒星団帝国には、地球に対して怨みを持つ人がいるかもしれませんが、東暗黒星団帝国は地球人と接触したことはないはずです。目標になる理由は考えにくい」

「そうか……。ところで、宇宙戦艦ヤマト乗組員諸君は元気かね？」

「残念ながら、ここにいる元乗組員は僅かだ。第一艦橋要員と若干の人員は名誉職として地球ないし地球近傍の任務に就いているが、残りは地球から遠く離れた前線にバラバラに配置されているよ。地球は極度に人手不足だね」

「有事の際にヤマトはどうするのだ。いくら改造が進んでも人員不足では使えないぞ」

「幸いここは宇宙戦士訓練学校もある。訓練生に改造を手伝わせっつ乗組員としての訓練も行っている」

「しかし、艦長の古代進はここにいないのだろうか？」

「古代進は艦長代理でしかないが、それでもいないと困る。そこで、教官ロボ山南を艦長役として艦長席に座らせてある」

「艦長として勤まるのか？」

「顔に威厳はあるし、教育一筋で過ごしてきたのも事実だ。訓練だけなら十分だ」

「実戦なら？」

「ベテランの艦橋スタッフの補佐が欲しいところだな」

「その人材はここにいないのだろうか？」

「彼らの配置転換の申請は出しているよ」

そこで、真田は気づいた。

「まさか。その隙に地球を攻めようとは思っていないだろうな」

「ははは。東の連中と戦うのに忙しい。そんな余裕はないよ」

その時ブザーが鳴った。

「真田さん、来て下さい」

「何事だ」

「正体不明の飛行物体、太陽系に飛来。冥王星、土星、木星の各基地と既に連絡が取れません」

「すぐに行く」真田は立ち上がった。

「その飛行物体の正体に興味がある。判明したら教えてくれ」姿無きグレート・エンペラーは言った。

「分かった。だから、私が一人にいるとき以外は出てくるなよ」

「分かっている。イカルスの他の者達には私の存在は秘密だ」

真田が司令室に行くと、既に火星基地とも連絡が取れなくなっていた。

「何が起きているんだ」

「分かりません」

「地球の古代守と連絡は付かないか？」

「ダメです。向こうも混乱しています。連絡は付きますが、古代守がいません」

「じゃあ、弟の古代進はどうだ。有人パトロール艇一〇号に乗っている

はずだ」

「有人パトロール艇一〇号が残存しているのは確実ですが回線が塞がっていて連絡が付きません」

「間違いなく生きているんだな？」

その時、別のスタッフが真田に紙を渡した。

「沈黙した基地と残存した基地があります。謎の飛行物体の進路上にある基地だけが沈黙していて、そこから離れた基地や宇宙船は残存しています」

「どういうことだ」

「少なくとも、我々がいるイカルスは見逃されたようです」

真田は後に立ったままの山南を振り返った。

「山南教官、イカルスに非常警戒を出して下さい」

「承知した」

「総員、ヤマトの発進準備を整えよと。それから通信班だけは地球の状況把握が最優先」

真田はイカルス内の通信機を取った。

「山崎さん、いますか？」

「はい」

「今はどこに？」

「ヤマトのエンジンルームです。機関の最終調整を開始するところです」

「問題無く行きそうかね？」

「バルブが一つ上手く入りません。あとで見に来て下さい」

「分かった」

その時、レーダー手が叫んだ。

「敵艦隊を探知！ イカルス周辺は通過しない模様ですが、まっすぐ地球を目指しています」

「地球防衛軍司令部に通報」

「ダメです。通信妨害です」

「何と云うことだ……」

それでは第一艦橋要員を地球から呼ぶこともできない。

真田、山崎ら少数のベテランとロボ艦長山南と学生だけでヤマトを動かせるのだろうか。

真田はそれでも希望を捨てなかった。

未確認飛行物体は、地球防衛軍司令部でもキャッチされていた。

しかし、正体が分からず混乱が続いていた。

「外洋センサー、すべて作動停止!」

「冥王星基地、通信途絶!」

「天王星、通信途絶!」

「海王星、沈黙!」

「土星基地、沈黙!」

守は、通信機に齧り付いていた相原に質問した。

「相原、どういことだ」

「はい。非常通信回路を使用しているのですが、応答がなくなりました」

その時報告が上がった。

「未確認飛行物体、速度、五〇〇〇宇宙ノット!」

「あと火星へ一万五〇〇〇宇宙キロ! 間に合いません!」

語り部エヌはそこで説明した。

「この頃、古代進はその有人パトロール艇の艇長として、火星に向かって飛んでいた」

「未確認飛行物体と衝突しちゃうの?」聴き手の一人が質問した。

「衝突はしない。だが、未確認飛行物体が火星にしたことを目撃することになったのだよ」

「何があったの?」

古代進はマイクを取って通信中だった。

「こちら第一〇パトロール艇、艇長古代進。ただ今より地球時間 55 分後

に火星基地に着陸する」

返事はすぐにあった。

「了解、こちら全て異常なし。ダイレクトに直進せよ」

そして、声のトーンが砕けた感じに変わった。

「古代、待ってたぞ。いいワインがあるんだ、久しぶりに一杯どうだ」

火星基地で待っていたのは旧友だった。

火星で特別訓練を受けていた頃以来だ。

古代は久しぶりに会う旧友に胸が高鳴った。

しかし、何かが火星を通過し、返事が無くなった。

「火星基地、応答せよ。火星基地」

返事はなかった。

古代は地球にいる兄、守のことを考えた。

兄ならどうするだろうか。

報告が先だろうか、それとも基地の救援に急ぐべきだろう。

いやまて。

地球にいる兄は火星の現状を知りたいに違いない。

現状を調べ、兄に報告するのが急務だ。

古代進は部下に命じた。

「エンジン、出力全開。火星へ直進」

操縦士が「了解」と伝えた。

だが、古代進の想像と違って、古代守は地球に接近する未知飛行物体の迎撃に忙しかった。小規模な基地しか存在しない火星と、大勢が住む地球では物事の軽重が違ったのだ。仮に、地球人類全員が倒れるような事態が起きれば被害は桁違いだ。

守は命じた。「第一級戦闘指令。迎撃ミサイル連射六速。ハチマルハチハチよりプラスへ追尾」

「発射!」部下が叫んだ。

しかし、ミサイルは命中しないで軌道を外れていった。

オペレーターが叫んだ。「ミサイル軌道を外れ、爆発」

「なに！」守は目を見開いた。

「未確認飛行物体接近。距離一〇万宇宙キロ」誰かが叫んだ。

「正体不明。識別不可能」また誰かが叫んだ。

「拡大投影せよ」守が命じた。

「ああ、大型ミサイルだ」誰かが悲鳴を上げた。

しかし、ミサイルだと断言してしまうのは早すぎた。

未確認飛行物体は着陸地を選別するかのよう空中で一時停止したからだ。

守は、おそらくミサイルではあるまいと判断した。しかし、正体は依然として謎だった。

未確認飛行物体は、佐渡犬猫病院から見えた。

しかし、アナライザー相手に飲酒に忙しい佐渡は窓の外など見ていなかった。

窓の外が騒がしくなった。「止まった」「止まったぞ」「きゃあ」

そこでやっと佐渡は気づいた。「なんの騒ぎじやい」

アナライザーは頭部を飛行させて外を見た。「アリヤリヤ、先生」

「あっ」佐渡も顔を出した。

「マタ ドコカノ イセイジンガ セメテキタノデショウカ」

「わからんわい、わしに聞かれたって」

「デモ ベツニ コウゲキヨウノ ウチュウセンニハ ミエマセンネ」

「それなら多分、地球に遊びに来たんじゃろう」

佐渡の感想にはもっともな理由があった。

数ヶ月前に宇宙を旅しているという異星人が来訪しているのだ。

暗黒星団帝国が存在していると思われる方向とは違う方角から来たので地球は受け入れた。彼らは地球を観光し、地球人と遊び、宇宙戦艦ヤマトの活躍に興味を示して記録データを大量に集めた。たった一隻の戦艦が星間戦争の行く末を何度も左右したドラマチックさがアピールしたらしい。

そして、宇宙戦艦ヤマトの見学を希望したがドック入りして解体整備中ということで希望は叶えられなかった。その代わりとして映画撮影用のレプリカが進呈された。その後、宇宙人達はお礼に贈り物を置いてそのまま旅立っていった。彼らは礼儀正しく温厚で何も敵対的ではなかった。

そういう宇宙人がまた来ただけ……という受け止め方は、何ら奇異ではなかった。

佐渡以外の人々も前置き無しに出現したことで驚いただけであり、攻撃してこないと分かれば騒ぎも沈静化していった。

しかし、古代守の受け止め方は違った。

正体分からないことには、地球防衛に責任を持ってないのだ。しかも、数ヶ月前の来訪者と異なり、既に複数の基地に何かを引き起こしているのだ。

「全地球非常特別防衛態勢ナンバーワンに入る。とくに科学調査隊は全力を上げ、一刻も早く敵の実体究明に全力を尽くせ、以上!」

守の指示には力が入っていた、

その時、通信士から報告があった。

「第一〇パトロール艇艇長より入電」

だか、それに最も反応したのは古代守より森雪だった。

「古代くんだわ!」と雪は小躍りした。

雪は真っ先に通信パネルに走った。「古代くん」

古代守もその後から来た。

パネルの中の進は報告した。「火星基地に生存者なし。全滅です」

「な、なんだって」守は声を上げた。それは守が考えていた被害の規模を越えていた。

「自分が火星基地到着寸前、光球飛行物体が火星を離れて行くのを目撃しました」

藤堂長官も出てきて質問した。「建造物の損傷は?」

「施設には全く損傷ありません。不思議なことに遺体にも何の傷も……」

「何の傷もなく、全員死亡しているのか？」

「そ、そうなんだよ、兄さん」

古代進は明らかに狼狽していた。彼の頭には、建物を透過して人間だけを殺す兵器の存在は無かった。

「馬鹿、勤務中だぞ！ 兄さんとは、何だ！」と守も狼狽して叫んだ。

「はっ、自分はこれから状況をさらに調査して、帰還します」

「古代くん」と雪は小さく祈った。

「頼む」藤堂長官も古代進に告げた。

その時、謎の物体が降下を開始した。

室内は騒然となった。

「動いた」

「動き出した！」

「来る！」

「地球に降りようとしている！」

参謀が報告した。「不明物体の到達予想地点は、ポイント A、八十九」

更に副官が補足した。「旧防衛軍地下司令部地区の未開発エリア付近です」

空間騎兵隊員に護衛された科学調査隊は着陸した飛行物体に接近した。

「センサー用意」

しかし、計測車両は見えない何かに接近を阻まれた。

「バリヤだ！」

調査隊員は、遠くから双眼鏡で観察した。

「受け入れる気はないわけか。単なる警戒だと思うか？ それとも敵対の意志ありとみるか？」

「無断で地球に航海した以上、敵対の意志ありでは？」空間騎兵隊員が答えた。

「こちらが受信できない方法で呼びかけてきた可能性はある。そもそもルールが違うという可能性もある」

「しかし、太陽系内の複数の基地を無力化してここまで来たのです。

やはり敵対勢力の爆弾では」

「なら、なぜ爆発しない」

「さあ……」

「仮に敵対勢力の爆弾だとしよう。だが、即座に爆発するわけではない。これが交渉を有利に展開するための手段だと見るべきだろう」

「交渉？ 何を交渉するというのです？」

「そのうちに分かるだろう。奴等がそれを望むなら、何か言ってくるはずだ」

その調査隊員の判断は半分が正しく半分が間違っていた。

確かに交渉の席でこれを送り込んだ者達は望みを明確にすることになる。

しかし、その前にだめ押しの一手を送り込んでくるのだった。

イカルスの真田は忙しかった。

地球との通信が断片的にししかできず、重要な情報が揃わなかったからだ。

少なくとも複数の惑星の基地が沈黙したことは分かった。

地球に何かが降下したことも分かった。

しかし、降下した物体が何かということになると見当も付かなかった。

真田は全体の指揮をロボ校長山南に任せると、自室に戻った。

そして、ダメで元々と思いながらグレート・エンペラーの名を呼んだ。

意外にもグレート・エンペラーはすぐに声だけで出現した。

「グレート・エンペラー。太陽系で何かが起きている。君は何か事情を知らないか？」

「真田。疑問を抱えているのは私も同じだ」

「えっ？」

「東暗黒星団帝国の連中が大規模軍事行動を起こしている。演習に出撃していたはずの大中間補給基地が、今日になっても演習地に来ていないことが分かったのだ。ではどこに行ったのか。あれがあれば、遠隔地で大規模軍事行動を起こせるぞ。しかし、どこに行ったのか場所が分からない」

「なるほど。守りの薄い場所を攻められると弱いわけですね」

「もしかしたら、真田の一大事と関係するかもしれない。何が起きているか教えるのだ」

真田は分かっていることを全て説明した。

「話は分かった」とグレート・エンペラーは言った。「結論から言えば、地球に降下したという飛行物体は大中間補給基地ではない。サイズも小さすぎるし、そもそも惑星の基地を沈黙させる能力を持ってはいない。大中間補給基地から艦隊を発進させて攻略したのならともかく、そのような艦隊は確認にされていないのだろうか？」

「そうだ。艦隊は確認されているが、謎の飛行物体から発進したわけではない」

「だが、地球と暗黒で同時に問題が起きるとはタイミングが良すぎる。虫の良い話だとは思いますが、しばらく私と真田の間で事実上の同盟関係を結ばないか？」

「いいでしょう」

「私を信じるのかね？」

「君は地球を裏切るかもしれないが、サーシャは裏切らないだろう」

「なるほど。一理はある」

「君こそ私を信用するのかね？」

「君はサーシャの育ての親だ」

「一理はある」

二人は一緒になって笑った。

ユキは司令部のテラスから夜空を見上げて恋人の安全を祈っていた。

「……古代くん……」

しかし、何かが光った。

「あ」

光点は増えていき、降下してきた。

「ああ」

雪はよく見ようと身体を乗り出した。

「あれは」

雪は司令部に走った。

「大変です。正体不明の降下兵が」

しかし、室内は既に騒然としていた。

「Bブロック方面に敵兵多数」

「第7支部が襲われている」

夜空に恋人の安全を祈っている間に時代は急変していた。

科学調査隊にも降下兵が殺到していた。

「ん、き、奇襲だ」

「降下兵の奇襲だ」

「迎撃せよ」

しかし、警備のために随伴した空間騎兵隊員の数など限られているし、重装備も持っていなかった。

蹴散らされるのは時間の問題だった。

空間騎兵隊員が調査隊員に叫んだ。

「敵対勢力でしたな」

「しかし、ますます興味が出てきた。なぜ奴等はこっちのデカ物を先に降下させてきたのか」

「その通りです。通常なら、先に降下先の安全を確保してから降ろすものです」

「ならどうして、あれを先に降ろした」

「研究するために生き延びて下さい」

空間騎兵隊員が銃を撃ちながら飛び出して、即座に蜂の巣にされた。

「馬鹿野郎」

調査隊員は、計測車両を運転して敵兵に突っ込んだ。

しかし、透明のバリアの存在を忘れていた。

敵兵数名をひき殺したあと、バリアに激突して車両は炎上した。

調査隊員も助からなかった。

車に轢かれた敵兵達はその場で身体をスペアの身体と交換し始めた。
そして何事も無かったかのように銃を持って戦いに戻って行った。

降下兵達が行ったことは、軍事施設、重要施設の奇襲制圧を除けば、音と光が派手なだけでほとんどが無意味な破壊活動であった。科学調査隊の襲撃も、大した意味は存在しなかった。同じように、鉄橋に取り付いた敵兵達は高速で通過する反磁力列車に銃撃を行ったが、それもまとめて大量の民間人を殺してみせるよりマシな意味はなかった。

しかし、それらは良い目くらましになった。
本隊の上陸を許してしまったからだ。

司令室は騒然としていた。

「対空ミサイル基地、占領されました」

「大統領官邸、包囲!」

「空港、爆破!」

「首相官邸、応答無し」

「防衛軍指令本部に向かってきます」

「未開発エリア警備隊、制圧されました」

「ちょ、長官。見てください」

「拡大、投影」古代守は命じた。

「な、何なんだ、あれは?」副官も絶句した。

海岸に背の高い巨大な歩行戦闘兵器が上陸するところだった。

そのことは、これほど大きな兵器を海底に隠すことを許し、今まで存在に気づきもしなかった地球防衛軍の失態を意味した。

更に、巨大母艦も地球上空にいて攻撃機を発進させていた。

余程のステルス性能を持った母艦とはいえ、これだけ巨大なものが地球上空に来るまで察知できないとは、これも地球防衛軍の失態を意味した。

「藤堂長官に責任を取らせるわけにはいかない。これは私が死んで責任を取るしか」と古代守が呟いたとき、藤堂がポンと彼の肩を叩いた。

「そういうことは、全てが終わってから考えたまえ。地球人の死は食い止めねばならない。今は反撃するのが先だ」

「はい。自分が間違っていました」

雪が報告した。「コントロールタワーが出ました」

「よし、切り換えろ」

「島です」コントロールタワーの島が名乗った。

「島、さっそくだが、各衛星軌道上の無人艦隊を第7周回軌道上に集結させ、地上援護に向かわせよ!」

「了解」

「集結から地球到着までの所要時間は?」

「約十分です。それまで何とか持ちこたえれば背後から不意打ちできます」

「よし、頼んだぞ、島っ」

「はい」

だが、あまりに事態が急展開したので島も古代守も頭に血が上っていた。藤堂すらも同じだった。

この時、無人艦隊は大中間補給基地に向かわせるべきだったのは言うまでもない。これだけの大部隊を稼働させるには、そのための補給拠点が地球近傍にあり、それを撃破すればそれだけで敵の戦力を弱体化できるからだ。

しかし、今そこで燃えている街を救わないという発想は彼らに無かった。その結果、無人艦隊は最悪の結末を迎えることになった。

無人艦隊を地球に差し向けると言うことは、上陸部隊を護衛するために控えていた敵の後衛の護衛艦隊の前に無人艦隊を差し出すのに等しいことだったのだ。

無人艦隊は自分から敵護衛艦隊の射線上に飛び出したようなものだった。

「見ろ。無人艦隊の背後に敵大艦隊だ」島が叫んだ。

「あ、ちくしょう、いつの間にこんなに」助手の太助も叫んだ。

「よし、これは迎え撃つしか無いぞ」島がさっそく指示を変更した。

その切り替えの素早さはさすがに理性派の島らしい迅速さだった。

しかし、コマンドが全艦に伝達するまでの時間、敵は待つはくれなかった。

隊列の乱れた無人艦隊は簡単に各個撃破されていった。

隊列を組み直すためのコマンドは混乱の拍車をかけた。人間の操舵手が臨機応変で調整していればこれほどの惨状にはならなかっただろう。

「無人艦隊の弱点を突かれたか」島が叫んだ。

その時、島のいるコントロールタワーも直接攻撃を受けた。

「うわあ」太助が叫んだ。

「俺が」島は呟いた。「俺が……俺があ艦隊に乗り組んでいたら！ くそっ！」

崩壊する無人艦隊は、地球に向かう古代のパトロール艇からも確認できた。

「畜生！ コントロールタワーがやられたんだ」

無人艦隊が撃破されたとなれば、残る戦力は何か。パトロール艇の貧弱な武装では、海賊を蹴散らすのがせいぜいだ。もっと強力な装備を持った兵器は残っていないか。そうだ、コスモタイガーだ。地球有人機基地にはコスモタイガーがあるはずだ。パイロット不足で遊んでいるコスモタイガーが並んでいるというニュースを見たことがある。

「こちら古代、これから地球有人機基地へ向かい、敵艦隊を迎撃します！」

「進！ やめろ！」古代守が通信機から叫んでいた。

「兄さん！ 黙ってこの大艦隊を見過ごせってのかい。うわっ」

パトロール艇は被弾した。

パイロットが必死の形相で叫んだ。「古代さん。この損害では正規の手順で着陸は無理ですよ」

「馬鹿。この状況で正規の手順で着陸できる基地が残っていると思うか？」

「失礼しました」

「ともかくこの戦場から可能な限りのスピードで離脱。有人機基地に何

とか不時着させるんだ」

「やってみます」

古代はグッと拳を握りしめた。

コスモタイガーで反撃以前に、戻れるかどうかの勝負になってきた。

司令部では古代守が森雪を呼んだ。

「ユキ」

「はい」

「これを持って有人機基地へ行け」

「え」

「進は必ずそこへ行くに違いない。この命令書を渡すんだ」

「はい。命令書の内容は極秘ですか？」

「いや、君にも関係する内容だ。移動中に確認したまえ。いや、移動中に熟読して暗記。敵に拘束されそうな場合、命令書は破棄して、口頭で古代進に伝達のこと」

「それほど重要な命令書ですか？」

「そうだ」

「分かりました。命に代えても」森雪は敬礼した。

森雪は有人機基地に向かった。

無人機の増加と、コスモタイガーの速度と航続力なら地球全体を一つの基地でカバーできることから、有人機を扱う基地は一つに集約されていた。

そのことは、この騒動で徒となっていた。

つまり集中攻撃の対象となっていたのだ。

幸い森雪は敵兵と遭遇しないで済んだが、到着した有人機基地は瓦礫と残骸の山だった。

古代も同じ光景を見ていた。

既に使用できる滑走路も残っていない状況だったので、パトロール艇は残骸に突っ込んで不時着させるしかなかった。

その際、パイロットは死亡した。

操縦士の席だけ残骸に押しつぶされたのだ。

隣の副操縦士の席に座っていた古代が五体満足で無事だったのは、本当に奇跡だった。

しかし、パトロール艇の残骸から出た古代が見たのは、瓦礫と残骸の山だった。

まだ使えそうなコスモタイガーを発見して駆け寄ろうとしたら、上空を旋回する敵機が攻撃してコスモタイガーを残骸に変えた。

もはや古代が使える有人機は一機も見当たらなかった。

「くそっ!」

彼らは自らを暗黒星団帝国と呼称していた。

自分たちが正当な暗黒星団帝国だと信じていたからだ。

建前上は……の話であるが。

彼らは、東西暗黒星団帝国の二つの暗黒星団帝国という文脈に乗る際は、東暗黒星団帝国と呼ばれる側だった。

つまり、グレート・エンペラーの国ではない。

聖総統スカルダートが支配する側であった。

地球攻略部隊の貴艦ガリアデスで、司令官のカザンが聖総統スカルダートに報告していた。

「総統閣下、奇襲は成功、我々は地球全土をほぼ制圧しました」

「奇襲成功は当然のこと、それよりヤマトはまだ見つからんのか」

「は! 全力で捜索中ですが、まだ発見の報告は……」

「何よりも第一にまずヤマトを探すのだ。徹底的に探せ」

「はっ、必ずや……」

カザンは地上を見下ろして思った。

ヤマト……どこにあるのだ。

視界に入る最も印象的な物体は、重核子爆弾だった。

地球側で謎の飛行物体と認識されていたアレだ。

それこそが、彼らの最大の切り札であり、彼らの最大のブラフだった。

重核子爆弾の使い方一つで勝敗は決まる。

そして、ヤマトだ。

カザンはそれを確信していた。

第2章 出撃

有人機基地で、まだ飛べるコスモタイガーを探す古代は、森雪と出会うことができた。

「ユキ！」

「古代くん！」

「ユキ」

「会いたかった」

「ぼくだって」

「古代くん」

古代が探していたのは有人機であって森雪ではないが、この際それほど良い二人であった。何より二人は愛し合っていたのだ。

しかし、森雪は職務を思い出した。

愛を囁くために恋人を探していたわけでは無いのだ。

「命令書」森雪は封筒をポケットから取り出した。

「命令書？」

「命令。旧ヤマト乗組員を集め、小惑星イカルス天文台の真田志郎と連絡をとれ、以上！」

「真田さん?!」

「私も手伝うわ、古代くん」

「だが、どうやって、みんなを……」

「英雄の丘へ行きましょう……苦しい時やつらい時は、みんなあの丘へ集まったじゃないの」

「英雄の丘……沖田艦長……」

現実の問題として、古代にも森雪にも他に行く場所はなかった。

命令系統は既に寸断されていて、地球防衛軍司令部ですら残っているの

かよく分からない。

遠くから銃声や爆発音が聞こえ、まだ抵抗している地球防衛軍部隊はあ
ることは推定できたが、その部隊がどこにあるのかも分からないのだ。

緊急時に集合する拠点は複数あったが、それに指定されている場所の一
つであるこの有人機基地の惨状を見ると、別のそれらを目指すのが賢いと
は思えなかった。

ここから徒歩で行ける見込みのある場所は、英雄の丘しかなかった。

英雄の丘では元艦医の佐渡酒蔵が助手のアナライザーを従えて燃える街
を見下ろした。

それから佐渡は沖田の銅像を見上げて言った。

「沖田艦長……とうとう地球もこんなザマになってしもうた。わしゃ、
ここであんたと地球が減びる姿を見ようとは思ってもみんかったよ。艦長、
もう何もかもおわりじゃ」

何もかもおわりじゃ……というのは、少し先走った感想だった。この時
点で抵抗を続けていた部隊はあるし、有人艦の主力部隊はほとんど無傷の
まま対西暗黒星団帝国のピケットラインで監視を続けていたからだ。太陽
系内の基地も、イカルスのように残ったものも多い。

しかし、佐渡としては打てる手は全て打った上で、「それでも救えなかつ
た」という感想に至ったのも事実だった。

電話も切断され、鉄道も動いておらず車も道路がダメ。武器すら入手で
きない佐渡に打てる手は尽きていた。

「アレ？」アナライザーが人影に気づいた。

相原が英雄の丘に上がって倒れ込んだ。「うっ」

「相原じゃないか」佐渡が駆け寄った。「よう生きとったのう、相原。さ、
沖田艦長に」

「英雄の丘周辺の敵の検問が解除されて……やっところまで」相原はそ
れだけ言った。

その時、更に英雄の丘を上がってくる人影があった。

「太田……南部も来たか……」

検問が解除されたので彼らもやっと到着出来たらしい。

「ワッ、ユキサント コダイサンダ」

「えっ？」相原が顔を上げた。

「おーい」古代が叫んだ。「佐渡先生！」

「古代! ユキ!」佐渡も叫んだ。「二人とも無事だったかい！」

「佐渡先生! みんなも元気か？」古代は再会を喜んだ。

「古代さん」一同が古代を囲んだ。

それから古代は相原の通信機に気づいた。「おお、いいもの持って来たな。さすがだ、さっそくイカルス我真田さんに連絡をとってくれ」

「はい」相原は通信を開始した。

「古代さん! 島さんが!」太助が島を助けつつ英雄の丘に上がってきた。

「島! 徳川!」古代は島と太助の姿を見て安全を喜んだ。

「古代……やっぱりな、ここにすればおまえに会えると思ったよ」島は言った。

「みんな、よう来た……沖田艦長、さすがあんたの息子達じゃよ。よう来おったわい」佐渡は涙ぐんだ。

「古代さん、地球は、このまま敵に征服されてしまうんでしょうか？」太助の不安はみんなの不安だった。英雄の丘に来たのは、誰もが他の選択肢を全て失ったからでもあったのだ。特に問題の深さを示すのは、太助の言った【敵】という言葉に集約される。つまり、敵の正体がまだ分からないのだ。分からないものほど不気味なものはない。

相原が叫んだ。「真田さんと連絡が取れました」

あれだけ困難だった通信が急に可能になっていた。

予定の奇襲行動が成功裏に終わり、戦果報告が飛び交うようになったからだ。当然、通信妨害は弱めねばならない。いくつもの周波数帯が妨害の対象外になっていた。相原はその一つを上手く捕まえたのだ。

「真田さん! 古代です!」と古代は叫んだ。

「しばらくだな、古代……」

「そちらの状況は……？」

「なんの被害もない。小惑星なので敵も甘く見たんだろう……我々も敵の不明物体をキャッチはしていた。だが強力な妨害バリエーションが働いていて、地球への連絡がとれなかったんだ」

「真田さん、ヤマトを知りませんか？ どこで、どうなっているのか！」

「我々は、ほとんどここにいるんです」島も言った。我々とは、地球勤務の元ヤマト乗組員を意味した。必然的に大半が第1艦橋要員だが、元機関員の徳川太助のような者もいる。

「そうか、実は私もそれを待っていたんだ」真田は心なしか嬉しそうだった。

宇宙戦士訓練学校があるイカルスでは、新人乗組員の人数を揃えられても、中堅幹部が揃っていなかったのだ。古代ら地球の元ヤマト乗組員は真田から見ても喉から手が出るほど欲しい人材だった。

「えっ！ 待っていた？」古代は驚いた。

「あるんだよ、ヤマトが」

「なんじゃと」佐渡も驚いた。

他の者達も驚いた。「えっ？」「ヤマトが？」

「そうだ、あるんだ……」真田は明言した。「ワタシガ、ココデ……」

そのあと通信は切れてしまった。

「おい、相原、どうしたんだ」古代は思わず言った。

「なんだ、いちばん大事なところじゃないか！」島も文句を付けた。

「ダメです。強力な妨害バリエーションが……」相原は首を振った。妨害が復活したのだ。

「しかし、はっきりと、ここでと言ったぞ！」佐渡が話を変えた。

「行きましょう、真田さんの所へ」相原は通信が困難だと伝えるために言った。

「そうだ、ヤマトのあるイカルスに行こう」古代はうなずいた。

「でも、古代さん、火星の向こうまでどうやって」太田が疑問を口にした。彼らは徒歩でしか移動できないのだ。

「それならわたしに任せて」森雪が解決策を提示した。「司令部の地下秘密ターミナルにある大統領緊急避難用の高速連絡艇を使えばすぐ着くはずよ」

「よし、それじゃ行こう」佐渡が話をまとめた。

当然、大統領緊急避難用の装備を勝手に使えば重罪となる。

言いだしたのが森雪で同意したのが佐渡でなければこれほどスムーズには動けなかっただろう。ここは、平時には長官の秘書を務める森雪や、軍隊ヒエラルキーを無視して偉い人ともすぐ酒を飲んでしまう佐渡がお墨付きを与えることに意味があった。

また司令部勤務だった相原は、この連絡艇が名目上は【大統領緊急避難用】となっているだけで、実際は緊急時の指揮官兵員輸送用であることを知っていたから異議を唱えなかった。もちろん理屈で考えればすぐ分かる。大統領官邸地下ならともかく、地球防衛軍司令部地下に【大統領緊急避難用の高速連絡艇】を置くはずがない。

古代や島もだいたい事情は知っていたから異議は唱えなかった。森雪が言う以上、使用許可は出ているものと考えたのだ。緊急事態なので、そのことをいちいち問いただすことはなかった。

そもそもの古代守からして、命令書を書いた時点でこの連絡艇の使用を許可した気でいた。連絡艇を使用してイカルスへ向かえと命令書に書かず、真田と連絡を取れと書いたのは、イカルスが敵の監視下にある場合は真田の判断で移動タイミングを遅らせて欲しかったからに他ならない。

もっとも、この時の森雪の心理と佐渡の心理は、少々違っていた。

森雪は、連絡艇の使用許可が出ているとは認識していなかった。当然だ。命令書にそのことは何に書かれていないし、口頭でも指示されなかったのだ。しかし、古代をヤマトに送り届ける必要があるという固い信念はあり、有人機基地壊滅を目撃した森雪が知っている残存が期待できる宇宙機は司令部地下の高速連絡艇だけだったのだ。森雪は自分の首を掛けるつもりで彼らを誘導していたのだ。

更に佐渡はもっと違った。医者として地球防衛軍の命令ヒエラルキーの

外側にいる佐渡は、単に宇宙船があるという事実に舞い上がって「行こう」と言ったに過ぎない。

しかし、そのような偶然の連鎖は結果オーライであった。

最終的に古代守が意図した通り、地球残留の元ヤマト乗組員の大半を集めて高速連絡艇でイカルスを目指すことになったのだ。

彼らは地球防衛軍司令部地下に走った。

そのような事情だから、かなりお気楽な佐渡はすぐに音を上げた。

「待ってくれー」

見かねてアナライザーが佐渡を抱き上げた。「はいどうぞ」

「ここよ!」雪が地下の扉の解放手順を開始した。

しかし、敵兵が迫っていた。

「ユキ、早くしろ」古代は雪を急かせた。

一同が扉を入ると、古代はドアのロックを撃って扉を閉鎖して固定した。

一同は連絡艇のタラップを上がった。

佐渡が転びそうになって「あいてて」と声を上げた。

「古代くん!」雪は最後に走ってきた古代を迎えた。

「だめだ! 天井のドームが開かない! このままでは発進できないぞ!」コクピットの島が言った。

発進シーケンスは自動操縦に固定されていて、島にも解除できなかったのだ。

大統領が乗るために用意されたのではないにも関わらず、大統領専用を装うために大統領専用機の同型機が置かれている弊害だった。大統領専用機は最悪大統領自ら操縦できるように離着陸は完全自動化されていたのだ。しかし、ドームの開閉だけは連動していなかった。

「たしか、外のコンピュータのロックだわ」雪はすぐに機外に引き返した。

「ユキ! 自動発進まで20秒だぞ」古代は叫んだ。

自動発進まで20秒……。それは専用機の設計者が苦労して20秒にまで短縮した努力の成果であったが、今ここではヤマト乗組員達を苦しめる制

約としてしか機能していなかった。

ドアが破られた。

「ユキ! 早くしろ!」古代は叫んだ。

走ってくる雪は敵兵に撃たれた。「あ……っ!!」

「ユキ! 早く乗れ!」古代は叫んだ。

しかし、接近する敵兵に気づいた。「うっ」

古代は敵兵を撃った。

「早く!」古代は叫んだ。

「古代くん!」雪は更に撃たれた。「あーっ!」

「ユキ!」古代は叫んで手を伸ばした。

「古代くん……」

「ユキ! しっかりしろ、ユキ!」

連絡艇は離床を開始し、古代と雪は腕を伸ばしあった。

「古代くん……」

だが、無情にも腕は離れた。

古代は離陸する連絡艇から飛び降りようとした。

相原が後から古代を止めた。「古代さん だめです!」

倒れた雪は去って行く連絡艇を見送りながら呟いた。

「古代くん! 古代くん! 古代くん……必ず……必ず会えるわね!」

そして、雪は痛みに「うっ」とうめいて失神した。

地球防衛軍司令部の地上部分も銃撃戦に巻き込まれていた。

もはや司令部としては機能していなかった。

司令部要員が自ら銃を取って交戦している状況だった。

英雄の丘で佐渡が「もう何もかもおわり!」と言ったことが正しくもあり、間違ってもいた理由がよく分かる。まだ交戦が続いている以上、まだ終わってはいないとも言えるし、司令部まで戦場になっているのは既に終わったも同然と言うのも事実だった。

古代守が負傷した。「あっ」

「古代さん」隊員が叫んだ。

その隊員も倒れた。「ああっ」

床に倒れた古代守は、壁の割れ目から離陸していく高速連絡艇を目撃してきた。

「やったな、進……」

古代守は勝利を確信してニヤリと笑った。地球の最終防衛兵器、宇宙戦艦ヤマトに足りない最後のピースがイカルスに旅立ったのだ。

それから苦痛で古代守は失神した。「うあっ!」

地球防衛軍司令部の戦闘が収束するかしないかという早い段階で技術部情報将校アルフォン少尉が地球防衛軍司令部地下を徘徊していた理由は、重核子爆弾の効力を防止または漸減させる防壁の存在を確認するためだった。そのような防壁の有無で、次の段階で行われる重核子爆弾を用いた恫喝に修正を加える必要があるからだ。

その結果、対ガミラス戦時の戦訓を元に作られた地下シェルターに逃げ込まれると重核子爆弾の効力が届かないことが分かってきた。対ガミラス戦時の地球防衛軍司令部もシールド嚴重であることは既に分かっていたので、その上に重核子爆弾を降ろしたが、新設の施設もやはり楽ではなかった。

地下掃討戦をやらねば、重核子爆弾の効果は不十分だ。

それにはかなり時間が掛かりそうだった。

ボタンを1つ押すだけで地球占領終了とは行きそうもない。

その時、アルフォンは倒れている地球人女性を発見した。無論、倒れている地球人など何人も既に見ているし、女性もいた。しかし、発見した女性は別格だった。

アルフォンの補助脳がその女性を査定して、頭脳身体ともにハイレベルと太鼓判を押した。

それはそうだ。森雪と言えば、女性でただ一人宇宙戦艦ヤマト乗り組みを許された言わば地球最高の女性だ。

アルフォンの補助脳が地球の大コンピュータと同じ結論を出したに過ぎない。

更に、検索を完了した補助脳が追加情報をもたらした。

戦闘部隊の連中が血眼になって探している宇宙戦艦ヤマトの元乗組員で、平時は藤堂長官の秘書。情が深く意志堅固。大胆かつ繊細。

超 A 級の重要人材だった。

このような人物は占領部隊に対して即座に引き渡すことが求められていた。

しかし、アルフォンは気が進まなかった。

引き渡すとどうなるか分かっていたからだ。

首を切断して首から上を解体し、脳だけを取り出して培養液に入れる。そして電極を接続して脳内の全ての情報を読み取るのだ。首から下は誰かの機械の身体を置き換える生身の身体として再利用するのだろう。

それはアルフォンの望む結末ではなかった。

もし、この女性が本当にそれほど優秀で情が深いのなら、殺してしまうのは惜しい。その前に、恋愛を楽しんでみたいものだ。

アルフォンは、通信機のボタンを押すと告げた。

「地球での住居、ワンルーム・マンションで良いと言ったが取り消す。海沿いのオシャレな一軒家を手配してくれ。できれば大きい奴を頼む。これでも少尉待遇なんだから無理は可能だろう？ そうか、可能か。場所はどこだ？ うん、分かった」

アルフォンは森雪を抱き上げるとそっと布をかけて隠した、彼は内規に違反して森雪を自宅に連れ帰ろうとしていた。

地球防衛軍のレーダーサイトは全て破壊されていたわけではないが、ネットワークが寸断されているので事実上無力だった。

それに対して、黒色側の警戒システムは十分に機能していた。

地球防衛軍がどこに伏兵を隠しているか分からなかったからだ。

事実、所在が掴めない戦力はいくらでもあった。

宇宙戦艦ヤマトはその一つに過ぎない。

もっとも、実態はそれほど美しいものではなかった。所在不明の戦力と言っても、単にドック入りしているだけの宇宙艦艇であったり、ガミラス戦後の急速建艦が祟って老朽化が早期に進行して解体された艦艇が多かったただけであったからだ。宇宙戦艦ヤマトのように、明確に地球防衛の切り札として秘匿された戦力は決して多くない。

しかし、暗黒側はまだ警戒を解いていなかった。

艦載機による警戒索敵網はまだ展開されたままであり、高速連絡艇はその警戒網の中に飛び込むことになった。

実態は完全に把握できていないものの、古代らもそのような警戒網の存在を予測していた。

どうやって敵を振り切ってイカルスに向かうか。

それは大きな課題であった。

高速さで相手を振り切ることができればそれで良い。

それでもダメなら佐渡先生が全員を仮死状態にするクスリを打つとまで申し出た。乗っているのが死体だけなら撃たれないかもしれないからだ。

だが驚いたことに追撃はなかった。

驚くほどスムーズに連絡艇は地球を離れた。

そのことに、少し不気味さを感じたのは相原だけだった。

古代は森雪を残してきたことでふさぎ込んでいたし、島らは連絡艇を間違いなくイカルスに誘導するために必死だったからだ。

地球攻略部隊の貴艦ガリアデスで、司令官のカザンが聖総統スカルダートに報告していた。

「総統閣下、お喜び下さい。ヤマトの所在がほぼ掴めました」

「本当だろうな」

「ヤマトに向かう小型艇をステルス偵察機で追尾しております」

暗黒星団帝国のステルス技術は特上だった。何しろ、イスカandal戦役で接近するゴルバを直前まで察知できなかったし、今回の地球侵攻も察知

されることなく占領部隊の上陸を可能にしたほどだ。一切攻撃行動を行わずに監視するだけの偵察機を完全に秘匿するぐらいは朝飯前だった。

「ヤマトはどこだ」

「おそらく小惑星の一つ。地球人がイカルスと呼んでいる天体と思われます」

「でかした」

「今のうちに小惑星ごとヤマトを破壊してしまいませんか」

「馬鹿者。ヤマトは無事に発進してもらわねば困るのだ」

「失礼しました」

「しかし、ヤマトを地球救援に向かわせてはならん。デザリウムに向かわせねばならない」

「どうやって……」

「情報をリークしよう。スイッチはデザリウムにあると敵に教えるのだ」

「しかし、現在の地球側の防衛部隊は混乱状態で情報が届くかどうか」

「西を経由するのだ」

「西……とといいますと、西暗黒星団帝国？」

「そうだ。西のグレート・エンペラーが、なぜかヤマトの真田と緊密に連絡を取り合っている。そのルートで情報を漏らす」

「では聖総統直接の情報部経由で」

「うむ。サーダに命じて処理させよう」

「では我々はいかがいたしますよう」

「ヤマトが出現したら追撃戦を行うのだ。沈める気で攻撃しろ。そうしなければ気づかれる」

「了解しました。総統閣下」

通信は切れた。

その情報は即座にグレート・エンペラーを経由して真田に届いた。

「真田」グレート・エンペラーは言った。

「済まない。今は忙しいのだ」

「分かっている。情報を手短かに話そう」

「頼む」

「地球を占領した勢力は東暗黒星団帝国で間違いない。確認が取れた。しかし国境を放り出して地球に攻め込む意図が読めない」

「なるほど」

「それから、東が作ったハイペロン爆弾だが、起爆スイッチは母星にあるとの情報が得られた。わざわざ地球でハイペロン爆弾を使うとも思えないのだが、そちらにも正体不明の飛行物体が来ているというので、万一を考えて伝えておく」

「感謝する」

「それより一つ質問がある」

「なんだ」

「サーシャを戦場に連れて行く気か？」

「残念ながら今の太陽系に安全な場所はない。イカルスに残して行けば安全という話でもない。ヤマトの第1艦橋で手伝いをさせようと思っている。そこが相対的に最も安全な場所だからだ」

「真田。一つアドバイスがある」

「なんだ」

「東暗黒星団帝国はかつて我々と一体であった。しかし分裂した。分裂後にも兵器は変化し続けた。その結果として、両者は良く似た兵器を運用しているが、細部はかなり違う。我々と戦った時と同じ結果になると思うな」

「アドバイス感謝する」

しかし、真田は安心してはいられなかった。

宇宙戦士訓練学校の生徒達は実戦を経験していない。いきなりの敵襲来で、素人集団にも等しいパニック状態に陥っていたのだ。

真田や山崎はベテランとして、なんとか彼らの焦りを受け止めて対応しなければならなかったのだ。

地球連邦会議場。

そこには、勝者である暗黒星団帝国占領軍トップと、地球側の首脳が並んでいた。地球側は、地球防衛軍司令長官の藤堂もいたが軍人は彼だけだった。

初めての顔合わせだった。

暗黒星団帝国占領軍のカザン長官が主導権を取って語った。

地球人は異議を差し挟めなかった。

「本日、我が艦隊は地球全土を完全に占領したことをここに宣言する。もし、我々に反抗する者があれば、都市周辺部に撃ち込んだ重核子爆弾をただちに爆発させる。諸君。見るがいい」

カザンは画面を指さした。

謎の飛行物体の名称が重核子爆弾であることが地球側にも明らかになった。

「我が母星の文明の粋を極めた爆弾だ。あの爆弾一発で、地球の自然にはなんら影響を与えることなく、一瞬の間に全人類の脳細胞を破壊し、絶滅させることができるのだ。その脅威にさらされたくなければ、我々の命令に服従することだ」

無論、それはハツタリだった。

二つの条件が満たされない限り、重核子爆弾は炸裂させられない。

二つの条件とは、地下掃討戦の終了と、効果範囲からの全暗黒人の退去だった。

地下を掃討して全地球人を地上に出さなくては効果が届かない場所ができてしまうし、そもそも重核子爆弾が効力を発揮する【全人類】には暗黒人も含まれてしまうのだ。

なぜ先に重核子爆弾だけ地球に降ろしたのか。

それは暗黒兵が降下する前ならいつでも暗黒兵を心配しないで炸裂可能だからだ。

事実降下直後に炸裂させる選択肢も用意されていた。

しかし、地球人があまりに平和ボケしていることが分かり、その選択は

発動せずに暗黒兵を降下させたわけである。

だが、地球人の多くは要求をハツタリと見抜けなかった。

重核子爆弾など見たことも聞いたこともないからだ。

ただ藤堂だけは、【何かがおかしい】と直感していた。

重核子爆弾の凄さは分からないものの、そんな重要な兵器の周辺に降下兵を降ろせば炸裂に巻き込まれかねない。それは筋が通らない。炸裂できない理由が何かあるに違いないと藤堂は考えていた。もちろん、持って来た以上はいつか使える時は来るのだろう。しかし、今ではない。

そのような状況下でカザンは言った。「最初の命令を下す。宇宙戦艦ヤマトの所在を明らかにせよ」

藤堂だけが微妙に表情を変えた。

「その男、お前が知っているようだな」

「ヤマトの所在を知って、どうしようというのだ」藤堂は堂々と言い返した。

「質問は許さん！」カザンは顔色を変えた。勝者であるはずなのに、敗者に堂々とした態度を取られるのは予想外だったからだ。

「恐ろしいのかヤマトが……たかが戦艦一隻、なぜそれほど恐れるのだ」長官は静かに言った。「そうだ。貴様たちが恐れるように、ヤマトは地球の希望だ、地球にはまだまだ力が残っているのだ。我々はまだ降伏したわけではない。知りたければ貴様たちで探すがいい！」

藤堂の言う【我々はまだ降伏したわけではない】はかなり無理のある言い分だった。というのは、この会議の目的そのものが降伏の調印だったからだ。調印がまだ行われていない以上、確かに【我々はまだ降伏したわけではない】のであるが、調印する気で政治家達が集まっているのも事実だった。この会議の式次第の最後の段階で調印が行われて正式に無条件降伏するはずだった。

つまり、ここで藤堂の立場は微妙になった。

地球連邦政府の意志は降伏だ。地球の全人類が人質に取られたも同然という状況で、いくら戦力が残っていても無意味だったからだ。西暗黒星団

帝国を警戒するピケットラインから主力艦隊を呼び戻しても時間が掛かりすぎる。その前に重核子爆弾が炸裂しては意味がない。

しかし、藤堂が自信たっぷりにかザンに敵対したことで別の可能性が浮上した。どこかに隠された宇宙戦艦ヤマトが波動砲で重核子爆弾を吹き飛ばしてしまえば状況はイーブンに戻る。近くにあるのなら、呼び戻すためのタイムロスも生じない。だが、あまりにハイリスクだった。それは地上で波動砲を使うことを意味し、それが地球に悪影響を及ぼさないとは言えなかったからだ。

しかも、イスカンドル戦役の戦訓からすれば、ゴルバ型自動惑星に波動砲は効果を持たない。重核子爆弾も同じなら波動砲を撃つ意味がない。意味がない兵器を使ったことで報復されては割に合わない。

「愚か者めっ！ ただちに処刑室へ連行せよ！」カザンは叫んだ。

その時、助命を嘆願した地球人政治家は誰もいなかった。藤堂の振る舞いはあまりにもハイリスクで地球に危機を招くと思われたからだ。

処刑室の前に列ができていた。

指揮官クラスは全員処刑と決まっていて、古代、島、相原、南部らももし捕まっていたら処刑されていたところだ。当然、古代守も列の中にいた。

幸い、人数が多すぎて古代守の特別な身体をチェックする暗黒兵は誰もいなかった。

ただ、階級と役職から処刑すべき人間と分類されたに過ぎない。他は、危険物所持を身体検査されたただけだ。

だから、古代守は依然として自爆用の爆薬を体内に持っていた。

既に古代守は、それを「いつ、どこで爆発させてやろうか」ということしか考えていなかった。警備兵から銃を奪って占領軍中枢に殴り込んだ上でそこで自爆するのが効果的か。それとも一度逃亡して機会を窺う方が良いか。いずれにしても、この場で自爆しても処刑室を吹っ飛ばすだけで効果が薄い。

しかし、やっと次は自分が処刑の番となった。

さて、どうしてやろうかと思った時、古代守は信じられないものを見た。処刑室に入れられようとしている藤堂長官だった。

藤堂長官は軍人である前に政府の閣僚だったから処刑はされないはずだった。

藤堂長官の表情は敗北者ではない堂々としたものだった。

古代守は即座に察知した。

宇宙戦艦ヤマトの所在情報を持ったまま死ぬ気なのだ。

わざと処刑されるように挑発的なことを言って占領軍を怒らせたに違いない。

咄嗟に古代守は考えた。

そのような男を死なせて良いのだろうか。

おそらく、藤堂さえ生きていればパルチザンを組織して抵抗できる。

いや、知名度と人望のある藤堂で無ければダメなのだ。

古代守がいくら生き延びても藤堂ほどの知名度と人望はない。

古代守は叫んだ。「おい、俺の方が先だ」

そして、藤堂長官の処刑室入りを止めさせた。

「何だと。おかしなやつだな。そんなに早く死にたいのか」敵兵が言った。「よし、先に始末してやる」

守は藤堂に囁いた。「長官。私が自爆します。その隙に逃げてください」

「君……」

「私はもう助かりません」

「何をしている！」敵兵が叫んだ。

「では」守は処刑室内に去った。

「守……」藤堂長官は事態の急展開に啞然としていた。そもそも、古代守が体内に自爆用の爆薬を持っているという事実すら知らなかったのだ。

だから、予想以上に大きな爆発が起きたとき、それに乗じて脱出することしかできなかった。藤堂が起きた出来事の全貌を把握するのは、全てが終わった後の話になる。

ステルス偵察機はもはや連絡艇を追尾していなかった。

行き先がはっきりすると先行してイカルス監視位置に付いてしまったのだ。

連絡艇は、アステロイドベルトの小惑星イカルスに到着しつつあった。

「あれがイカルスだ」島が言った。

「よし、相原、天文台と連絡をとれ」古代が連絡を命じた。短距離無線なら敵に傍受されないと思っての古代の判断だった。それゆえに、ここまではあえて連絡を取らなかったのだ。

「はい」相原は通信機を起動した。「イカルス天文台、イカルス天文台、こちら元ヤマト乗組員。高速連絡艇にて上空に到着しつつあり、これより誘導願います」

しかし応答は無かった。

「イカルス応答せよ！」相原が叫んだ。

「どうした、誰もいないのか？」古代が振り返った。

「あれを見ろ」島は開きつつあるドームを指さした。

「よし、あの中に着陸」古代は命じた。何かあれば早急に対処する必要があったからだ。

「しかし大丈夫かな、古代。誰もいないのに」

「この際だ、強行着陸」古代は既に楽な未来は待っていないことを確信していた。

しかし、連絡に応答しないでドームだけ開いたのは全て宇宙戦士訓練学校の生徒達の不慣れが原因であった。

ドーム係は操作に不慣れでいきなりドームを開いてしまった。

通信係はドームを開く前の通信手順は知っていたが、ドームが開くのを見てそれらの手順は既に終わっていると思い込んでいた。

更に言えば、古代らを出迎える予定の係は緊急に機関調整の手伝いに駆り出されて古代らを出迎えなかった。

古代らは、結果として無人のポートから直接イカルス基地に入ることになった。

しかし、古代らはすぐに面食らうことになった。

見慣れた光景がそこにあったからだ。

「ここは何だ？」古代は呟いた。

「まるでヤマトの第三艦橋そっくりだ！」南部が叫んだ。

そこからエレベーターで上がると見慣れたヤマトの第1艦橋がそこにあった。

「間違いなくヤマトだ！」島も同意した。

「俺たちはヤマトに帰って来たのだ！」古代は感慨を噛みしめた。

その時、エレベーターで上がってきた一団があった。

「よう！ みんなよく来たな！」真田が歓迎した。

「真田さん！」

「山崎さん！」

真田や山崎らが顔を揃えていた。

徳川はかつての直属上司を見つけて「山崎機関長！」と叫んだ。

「どうして出迎えてくれなかったんです。ちょっと不安になりましたよ」古代は笑った。

「いやあ、山崎くんと一緒に機関の最終チェックに追われていてね」真田は頭をかいた。

「君たちのことだ。間違いなくここに現われると思っていたよ」山崎はうなずいた。

不慣れな訓練生が緊急出航の準備中に配管を一つ吹っ飛ばして対応していたという事情までは説明しなかった。真田も山崎もあくまで最終チェックで押し通すつもりだった。乗組員がド新人ばかり、という不安を与えて、せっかく来た古代らが逃げてしまっただけは困るからだ。

「あれ。ユキがいないな。どうしたんだ」真田は不審に思った。

「なあに、ユキのことじゃ、きっと無事でいてくれるじゃろ」佐渡の一頃で真田は察した。

「そうか」

上手く行っていないのはどこも同じだ。真田はそう思った。上手く行っ

ていないのはイカルスだけではない。

「でもよかった、ヤマトが健在で」島が言ったおかげで話題が切り替わって真田はホッとした。

「うん、長官から私が預かり、非常の事態に備えて管理していた」真田は説明した。

その時、背後の若者達が不機嫌そうなのに真田は気づいた。

彼らを紹介するためにわざわざ連れてきたのだ。

「ああ、そうだ。紹介しとこう」真田は彼らを紹介した。「みんな、この宇宙戦士訓練学校の生徒で、私と一緒にヤマトの整備をやってくれていた……」

それからパイロットの一人を指さした。

「誰かに似てるだろ？」

「死んでいった加藤にそっくりだ」古代は彼をしげしげと見た。

「加藤四郎です。兄の遺志を継いで、コスモタイガーの訓練を続けていました」

「そうか！ 加藤の弟か！」古代の顔が明るくなった。否定的な状況ばかり見てきた古代には、加藤四郎は救いに見えた。

「まるで、加藤が生き返ったみたいだぞ」島も喜んだ。

「ところで、新艦長には真田さん……、あなたが？」古代は真田に質問した。

「いや、私はそんな柄じゃない。沖田艦長や土方さんの後輩で、宇宙戦士訓練学校の校長をされ、新しい世代の人間教育一途にやってこられた……」

艦長が艦長室から第1艦橋に降りてきた。

「私が艦長の山南だ」

そして、山南は一同を見回した。

「私は敵を打ち破るために艦長に就任した。もちろん、諸君もそのつもりだろう。今後私は諸君がかつてのヤマトの乗組員として特別扱いはしない、ヤマトは新しく生まれ変わったのだ。戦いに勝つという目標のもとに、

全員新乗組員のつもりで戦ってもらいたい」

その時、真田が古代に耳打ちした。

「古代、気を悪くするな。あれはロボットだ」

古代は驚いた顔になった。

「生徒達をしごく鬼教官として用意されたロボットで様々な教育者の人格が複合して組み込まれている。残念なら宇宙戦士訓練学校の生徒達の多くは古代進を直接知らない。睨みを利かすために徹底させる時間がない。そこで鬼教官を暫定的に艦長に据えることにした」

「では……」

「事実上の艦長はおまえだ。細かい指示はロボ山南にも出せるが、大局的な意志決定はおまえが下せ、いいな」

古代は無言でうなずいた。

そのとき、アナライザーが叫んだ。

「アッ アッ ユキサンダ ユキサンガイル」

少し森雪に似た少女が入ってきた。「うふ」

真田は紹介した。

「真田滯、私の姪だ……ヤマトの戦士として恥ずかしくない教育はしてある。今後、森ユキの任務につかせようと思っている」

真田の思惑としては、本当なら森雪の任務を補助させたかったところだ。あくまで主任務は森雪。サーシャは真田滯の名目で目の届く安全な場所に置いておきたかっただけだ。しかし、森雪が来ないという番狂わせがあった以上、止むを得ない。

しかし、一同はそのような真田の事情などお構いなく、若い女性に注目していた。

「何をみんなボケツとした顔をしとるのだ。今は一刻を争う時だぞ」真田は活を入れた。

みんなが動き出すと、真田はサーシャに囁いた。「すぐ隊員服に着替えてきなさい」

「なぜですか？」

「あのアナライザーというロボット、ガミラス戦の末期に誰かが変なプログラムを入れたらしく、スカートめくりの常習犯だ」

「まあ」

スカートの私服のままではまずいと気づいて、すぐにサーシャは第1艦橋から消えた。

そして真田は振り返った「艦長」

「うん。ヤマト、ただ今より地球に向けて出動する」山南はうなずいた。なるほど。鬼教官ではあるらしいが主体性はないと古代は納得した。

古代はだめ押しの艦内放送を行った。「ヤマトの戦士諸君に告ぐ。総員ただちに部署につけ!」

彼らが本当に戦士と呼ぶに値するかはまだ分からないが、戦士と呼んだ。戦士と呼ぶに値するか否かに関係なく、これからは一人前の宇宙戦士に降りかかるあらゆる苦難が彼らを待っているはずだからだ。

その時、相原が報告した。「地球より入電!」

この当時、入電という用語の意味は錯綜していた。電文を受信することも、ビデオ電話のリクエストを受信することも入電だった。この場合はビデオ映像通話であったが、それも入電扱いだった。

パネルに藤堂長官の顔が映った。

「長官! ご無事でしたか!」古代は叫んだ。古代に渡された命令書は古代守が用意したもので、長官の消息は何も情報がなかったのだ。

「私は今、地下都市の旧地球防衛軍司令部にいる。同志を集め、あくまで敵と抗戦を続けてゆく」長官は自分が置かれた状況を簡潔に説明した。

「長官……ユキは……森ユキはその中に?!」

「ユキの消息はわからんのだ。生きていれば必ず同志として参加するはずだが……」

「じゃあ、ユキは……」

「古代、君には気の毒なことばかり伝えねばならん……お兄さんの守くんも……」

「えっ!」

「私を処刑室から逃すために犠牲になってくれたのだ」

森雪消息不明、そして兄の死はダブルパンチとなって古代を襲った。

出合ったばかりの真田濡つまりサーシャのことは既に頭から消し飛んでいた。

古代の後で、真田は遂に切り札の爆弾を守は使ったらしいと察知した。

そして、森雪の席つまり今はサーシャが座るべき席を見た。幸い、サーシャは私服から隊員服に着替え中で、その場にはいなかった。父である古代守の死を聞かずに済んで良かったかもしれない。これからヤマトという見知らぬ環境に慣れるだけでも大変だからだ。

「長官、ヤマトはこれよりただちに敵黒色軍団撃滅のため、地球に向かいます」山南は宣言した。ロボ山南に与えられた義務感がそれを求めたからだ。

「いや、待ってくれ山南君」長官はそれを止めた。

「どうしてです、長官!」

「諸君。これを見たまえ」

藤堂が【諸君】と呼びかけたのは、ロボ山南の意志決定が事実上第1艦橋の合議だと察したからだろう。

長官は言った。

「古代達は見ただろう。敵の重核子爆弾だ。やつらはこれ一発で全人類を滅亡させてみせると宣言した。真田君、君はどう思う」

真田は驚愕した。

それはグレート・エンペラーから教えられたハイペロン爆弾に他ならなかったからだ。どうやら東暗黒星団帝国では重核子爆弾と呼んでいるらしいが、ハイペロン爆弾に他ならない。

「長官、これはハイペロン爆弾です。間違いありません」真田は断言した。

「ハイペロン爆弾?!」長官は耳慣れない言葉に驚いた。

「これが爆発すると、地球上の中間子質量が破壊され、一瞬の内に人間の脳細胞が破壊されて、全滅してしまうでしょう……」真田は効能を説明

した。

「真田君、この爆弾についている起爆装置なんだが、それをどこで操作するのか、まだわかんのだ」

「それはこの爆弾の機能目的から見て、起爆コントロール操作は地球上ではなく敵の母星本体にあります」

ついでに言えば、グレート・エンペラーからの情報も敵母星にあることを裏付けていたがそこまで説明することではなかった。真田とグレート・エンペラーの関係は秘密なのだ。明らかにすることはできない。明らかにするとどちらも裏切り者して処刑されかねないからだ。既に死んでいるグレート・エンペラーの処刑が何を意味するのか分からないが。

「母星本体?!」古代が声を上げた。地球に戻って逆襲すると思っていた古代にしては当然の反応だろう。

「そうだ」真田はうなずいた。

「そんな遠くでコントロールするなんて」島も絶句した。

彼らには意外に思えたが、爆弾本体とスイッチを同時に奪われないためには、離して用意するのは常道。しかも、戦略的な駆け引きの道具に使うなら、権力に直結する場所にスイッチを置くのは当然のことだろう。

仮に通信妨害されて現地で起爆する決断を実行するためのスイッチがあるにせよ、それ一つとは想定できない。そして、量子通信を用いていれば、妨害はあまりに難しい。

「それじゃ、地球の敵を撃滅したって何にもならないじゃないですか」古代が悔しそうに叫んだ。

「そうだ。このままではとても地球の占領軍を攻撃することはできない」真田はうなずいた。確かに真田の想定から外れた事態ではあったが、想定外というほどでもなかった。

「そうすると俺たちは敵の母星へ行かなければ地球を救えないのか……」島は考え込んだ。

「それも、ハイペロン爆弾の爆発前に攻撃しなければならん」真田は釘を刺した。ハイペロン爆弾は気分次第でボタンを押せるものではないが、

無限に待ってくれるわけでもない。同胞の待避が完了すればボタンは押せると真田は推定していた。

「行きましょう! 母星へ!」古代は叫んだ。

「行こう」南部も同意した。

「母星へ行こう」太田も唱和した。

他の者達も同意した。

「行こう」

「行きましょう」

「うむ。長官! ヤマトは即刻、敵母星に向かって発進いたします」山南が意見を集約した。その集約に山南の主観はなかった。しかし、誰もそのことに気づかなかった。全員の意見が一致していたからだ。

「うむ。諸君、航海の安全を祈る」長官はヤマトの成功を願った。

「ヤマト、発進準備に掛かれ」山南は命令した。

「総員に告ぐ。総員に告ぐ。ヤマト発進準備にかかれ」古代が復唱した。

「エンジン始動!」島が山崎に命じた。

「波動エンジンへの閉鎖弁オープン!」山崎は機関室に命じた。「波動エンジン内圧力上昇へ!」

「圧力上昇!」機関室の太助が復唱した。

「波動エンジンへの接続準備。フライホール始動!」山崎が更に命じた。

「波動エンジン点火十秒前」島が叫んだ。

「岩盤、爆破。スイッチオン」真田がイカルスの岩盤を爆破した。さらばイカルス、さらば宇宙戦士訓練学校。それらは全て粉々になって消えてなくなる。

「四、三、二、一!」島がカウントダウンした。

「フライホイル、接続点火」山崎が命じた。

「ヤマト、発進!」古代が宣言した。

そして、イカルスの岩盤の中から宇宙戦艦ヤマトがその姿を出現させつつあった。

この光景は宇宙戦艦ヤマト史上での突出した伝説的なスペクタクル映像

になったが、この時点でそれを記録すべきと思った地球人はいなかった。ただ、東暗黒星団帝国のステルス偵察機がこっそり記録しているだけだった。

この記録映像は東暗黒星団帝国の母星と地球に送られ、母星では偽の宇宙戦艦ヤマトの歴史を描く映像に使用され、地球に送られた分は地球側に接收されてアーカイブに記録されることになる。

語り部エヌは語った。

「こうして、太陽系に別れを告げたヤマトは、敵黒色艦隊の出現点である乙女座宙域の方向、四〇万光年の距離にある暗黒星雲に向かって、長い旅を始めた。しかも、重核子爆弾の爆発前に敵母星に到達しなければならない」

子供達がざわめいた。

「十四万八千光年の往復に一年かかったヤマトが四〇万光年なんて無理だ」

「いや、そもそもゴルバに勝利してないヤマトが勝てる敵なのか？」

語り部エヌは慌てずに言い添えた。

「また、ヤマトの武器もいくつか改良された。主砲のエネルギーもカートリッジ化され、あらゆる範囲を同時にキャッチ分析できる全天球レーダー室も装備された。中でも、ヤマトの波動エンジンは大幅にパワーアップし、さらに新開発のスーパーチャージャーによって、連続ワープが可能となり、ヤマトはただちに、連続ワープのテストを兼ねて、小ワープを行うことになった」

「改良されてるんだ」

「当然だね」

子供達は囁き合った。

ヤマト艦内はワープで緊張していた。

もちろん、乗組員の大半はワープ経験がある。

しかし、あくまでお客さんとしてのワープだ。

ヤマト大出力波動エンジンを自分たちで動かす荒々しいワープなどほとんどが初体験だった。特にヤマトのワープに慣れているはずの元乗組員ですら、新波動エンジンを使ったワープは未体験なのだ。

自然と緊張した空気が艦内に漂う。

「ワープ準備完了!」真田が宣言した。

「波動エンジン、異常なし!」山崎が報告した。これでもうワープの中止はない。

「ワープ、自動装置、セット・オン!」古代が命じた。

「ワープ、一分前。各自ベルト着用!」島も宣言した。

機関室では、徳川太助が新人菊池の面倒を見ていた。

「一分前だぞ。はやくしろ」

「は、はい」菊池が慌ててベルトを締めていた。

医務室では佐渡が猫に語りかけていた。「みーくん、地球とも……当分お別れじゃぞえ」

第1艦橋では古代が宣言した。「ワープ、三〇秒前!」

宇宙戦艦ヤマトを追尾するガリアデスの司令室では、やっとヤマトに接近していた。

「ヤマトを捕えました。右17度方向、距離ふたまるまる宇宙キロ、我が暗黒星雲に向かって進行中」スタッフが報告した。

「何、我が母星に向かうというのか……。ならん。全力を上げてヤマトを追撃せよ」カザンは力強く命じた。

もちろん、命令は阻止ではない。あくまで追撃だ。

本気の追撃戦を実行しなければヤマトは疑ってしまうだろう。

部下には何も教えていない。

本当に母星に向かわせてはならないと思って戦うだろう。

それで良い。

カザンの仕事は、ヤマトから地球救援という選択肢を奪い、デザリウム

に送り込むことにあるのだ。

そうとは知らない第1艦橋では、古代がカウントダウンしていた。

「三、二、一、ワープ!」

「ワープ!」島がレバーを引いた。

ヤマトは小ワープに突入した。

それをガリアデスの艦橋で目撃したカザンは「何と早いワープだ……」と漏らしたという。これはワープするヤマトのスピードが速いという意味もあるが、それ以上に、カザンが想定した以上の素早さでワープしてしまったことへの感慨も大きい。カザンは交戦して尻を叩かねばワープしないだろうと思っていたのだ。まさか交戦もしないうちからワープしてしまうとは思っていなかった。

第3章 航海

アルフォン少尉の館では、森雪がうなされていた。

「ああ、古代くん、ああ」

そして、ハッと目覚めた。

アルフォンがベッドサイドから見下ろしていた。

「まだ動いてはいけない」

「あなたは……」

「私は地球占領軍技術部情報将校のアルフォン少尉」

「なぜ、私をここに……」

「傷ついた美しい女性を収容所へ運ばせるわけにはいかない」

アルフォンの行為は規律違反ではあったが、黙認されていた。というのは、同じことをしたのはアルフォンだけではなかったからだ。気に入った異性、たまに同性を囲って愛人にした暗黒星団帝国将校や兵士は多い。

アルフォンの行為が見逃されたというより、同じことをする者達が多めに多く取り締まれなかったというのが実情だった。

「じゃ、あなたは……あのターミナルで……」森雪は倒れる前のことを

思い出した。

「どんなに勇猛な男でも、あなたほど勇敢には戦えなかった」

この言葉は実は意味深だった。

アルフォンは、実際に森雪が戦った場面を見ていないのだ。ただ銃撃戦の音を聴き、そのあとで友軍兵士の死傷者の山を見ているだけだ。そして、アルフォンの思い込みとは違って、実際に森雪は銃を取ってはいなかったのだ。ただ、旧ヤマト乗組員を案内しただけだ。

しかし、森雪の受け止め方は違った。戦士たちと一緒にヤマトを目指し、連絡艇を発進させるために身体を張ったことは十分に【勇敢な戦い】であった。森雪は、少なくとも銃を取る以外の方法で行われた森雪の戦いと貢献を理解してくれたと信じてしまった。

そして、それが森雪のその後の行動に影響を与えた。

即座に逃亡を図るのでは無く、まず古代進らの行く末を質問することを優先してしまったのだ。

「教えてください！ 古代くんたちは無事に地球から発進したんですね？」

「古代…君が夢の中で呼び続けた男の名だ。そう。彼らは私たちの警戒網を縫って発進した。しかし、追跡した監視艇の報告では、あの高速連絡艇には生命反応が消えていたようだ」

「生命反応が?!」

森雪が期待した通り、アルフォンは誠実に答えてくれた。

しかし、それは正しい情報ではなかった。

アルフォンが嘘つきだったわけではない。確かに地球占領軍司令部は、高速連絡艇に生命反応はなかったと報道していた。そのように報道した理由は、血気にはやっただこかの部隊に高速連絡艇を攻撃させないためだった。ヤマトの所在を探るには、あの連絡艇は撃破されずにヤマトに到着する必要があったのだ。

しかし、技術部情報将校のアルフォンがその委細を知ることはなかった。技術部情報将校とは要するに軍に雇われた技術屋であって、将校の階級に準じる扱いと決められているだけだ。けして、正規の将校ではなかったの

だ。いくつかの機密情報は、前線部隊の少尉に知らされる場合でもしばしばアルフォンには開示されなかった。

しかし、アルフォンは気にしていなかった。

こうして森雪を自分の家に置くのに何の問題もなかったからだ。

「多分、途中で内部に事故でも発生したのだろう」アルフォンは言った。そこはもうただの推定だった。

「ううう」森雪は泣き崩れた。

しかし、泣きなら冷静に状況を分析していた。

情報が錯綜した占領下で、しかも様々な欺瞞情報が飛び交っている。高官の秘書を経験していれば、それぐらひは容易に想定できる。だから、古代の死は事実かどうか分からない。

そして、アルフォンは漠然と森雪の変化を察知した。

彼女は古代の死を信じていない。

だが彼には古代の死を確認する方法の持ち合わせが無かった。

「小ワープ終了！」島が宣言した。

「波動エンジン、異常なし！」山崎はホッとした表情で報告した。

「現在位置。第一一番惑星より 18 万 3000 宇宙キロ光年、方位 280」相原が測定結果を報告した。

「小ワープ一回で 0.7 万光年、すごいスピードだ！」ワープでは仕事がない南部は喜んだ。

「レーダー装置に損傷発生！」サーシャが報告した。

「やっぱりスピードの影響が出たか……」真田は考え込んだ。エンジンのパワーは上がったが全ての装備がそれに応じた強化を受けているわけではないのだ。

「それだけ、ワープ性能が優れているってことだな」島は簡潔に要約した。

速さには代償があるのだ。

「真田君、修理を急いでくれたまえ」山南が命じた。

「了解」真田は立ち上がった。

こういう指示は、ロボ山南にも問題無く出せるのだ。

古代は立ち上がって山南を振り返った。

「艦長! この間、敵来襲に備えて、偵察機を発進させます」

一見、艦長に意見を具申しているようにも見えるが、事実上の艦長である古代の決断を名目上の艦長に承認させているだけだった。

ヤマトから偵察装備のコスモタイガーが発艦した。

カタパルト上のコスモタイガーを整備中の古代進にサーシャは近づいた。

古代進はまだ真田滯の正体がサーシャだとは知らない。

だからイタズラ心で接近したのだ。

「さびしそうね、叔父さま」

「おまえなんかに何が分かるんだ。第一俺は叔父さんなんかじゃない。

まだまだ若いんだ!」

「いえ、叔父様よ」

「うん?」

「ねえ見て、見て……私よ……サーシャ。サーシャよ」

「なに。そんな馬鹿な!」

サーシャの予測通り古代進は驚いた。

「うふふ」

「君は兄さんとスターシャさんの、子供。サ、サーシャ」

「いつまでそんな驚いた顔しているの? 叔父様。うふ。驚くのも無理ないわね。これは当分真田さんと私たちだけの秘密ね」

「そうしよう。サーシャ、実は……」

「私が 1 年でこんなに大きくなったんで驚いているんでしょ? 私の体には半分地球人の血とイスカandal星のお母様の血が両方流れているのわ。イスカandal星人は大人になるまでの成長が凄く早い。でも、これからの成長は地球の人と同じよ。まわりの人を驚かせてもいいけないし、それに地球にはあたしが育つのに合わないところもあって、だから、お父様は私

を真田さんに預けてイカルスで、育てていただいたの」

この説明は厳密には正しくない。正しくないが、サーシャにはそのようなものと説明されていた。

「そのことは守兄さんから聞いて知っていた」

「お父様、お元気？ もう長い間、お目に掛かっていないわ」

「あの」

「なにか。なにかあったの？ お父様に何があったのね？ 叔父様」
やっとならサーシャも察した。

「兄さんは、いや、君のお父さんは、亡くなられた……」

サーシャのイタズラ心は消し飛んだ。

サーシャは泣きながら古代進の胸に飛び込んだ。

サーシャは、古代進の胸で泣くしかなかった。

「サーシャ サーシャ、思いっきりお泣き。これからは僕が兄さんの代わりになる」

しかし、僕が兄さんの代わりになると宣言したところで、何をして良いか分からない古代進であった。結局、古代進はサーシャの父親代理にはなれなかった。ヤマトの艦長代理になるようなわけにはいかなかったのだ。古代進は、父親代理になる代わりにサーシャを愛してしまうことになる。

語り部エヌは語った。

「その頃、索敵中の偵察機は、暗黒星雲を背にした敵の大中間補給基地を発見していた。古代と加藤たちコスモタイガーはただちに出撃し、敵基地の殲滅に向かった」

「ねえ、ヤマトは急いでいるはずなのに、なぜ攻撃したの？」子供達が質問した。

「それはヤマトの進路上に基地があったからなんだよ。迂回するより艦載機を先行させて攻撃した方が有利と考えられたからなんだ」

発進していくコスモタイガー編隊を見ながら真田は考えた。

大きさといい形状といい、偵察機が発見したのは、グレート・エンペラーが演習地から消えたと言っていた大中間補給基地だろう。しかし、そうだとすると西暗黒星団帝国と戦う切り札を地球の近くに移動させた理由は何だろうか。

これを攻撃する方が良いと真田が判断したのは、【撃破しておかないと破格の戦力量の追撃が来て足を止められるぞ】というグレート・エンペラーの助言ゆえだった。

しかし、そういう戦術面のアドバイスはそれはそれとして、なぜこれが地球の近くにあるのかという戦略面の理由は全く分からなかった。

コスモタイガー隊は、古代隊と加藤隊に別れていた。

古代隊は雷撃装備、加藤隊は急降下爆撃装備だった。

「加藤、お前の初陣だ。しっかりやれよ」古代は励ました。

「まあ、見ててください!」加藤はあくまでクールだった。

性格的には兄の三郎とは別人だな、と古代は思った。

突破口を作る任務を持った加藤隊は急降下した。

次々とミサイルを発射し、爆撃に成功した。

「やった」

「全機ドーム内に突入! 攻撃!」古代は命じた。

しかし、ドームが閉じ始めた。

「おお。全機、反転! 上方へ!」古代は編隊を脱出させた。「く、くそう」

古代は入れそうな場所を探した。

小さな溝があった。

「あそこしか侵入口はない。ドーム内に突入する。全機、続け!」

古代隊は突入した。

やがてヤマトからも基地は目視された。

「見ろ! 基地が動き出した!」島が叫んだ。

「あの基地自体が巨大な宇宙空母なのだ!」真田は説明した。グレート・

エンペラーがこれに手こずっていたのは、これが単なる移動基地ではなく、装甲と火力を有する事実上の超巨大空母だったからだ。しかし、ヤマトクラスの大型戦艦の砲撃に耐えられるほどの装甲は持っていなかった。それにも関わらずグレート・エンペラーに沈められなかったのは、内部に抱えた防衛艦隊が接近する前に仕留めてしまうからだ。だが、今やその防衛艦隊は古代隊のコスモタイガーが仕留めてくれた。しかし、その仕事も既に終わりだ。

「全機、敵中間基地より離脱せよ！」山南が命じた。

「了解！」古代は編隊を離脱させた。

「ようし、今だ。目標敵中間補給基地！ 主砲発射！」山南は射撃を命じた。大中間補給基地は確かに事実上の巨大宇宙空母であった。

しかし、至近距離からのヤマトの砲撃に耐えられる装甲があるはずもなく、いくら巨大でもショックカノンだけでケリが付いた。

波動砲を発射する必要すらなかった。

波動エネルギーの浪費を避けられたのは、先を急ぐヤマトには朗報だった。

しかし、大中間補給基地崩壊の報は東暗黒星団帝国にとっては悲報だった。

ヤマトの予想進路とは大きく外れた場所に配置したはずなのに、ヤマトのレーダーが損傷したせいで進路がずれ、大中間補給基地付近にワープアウトしてきたのは誰にも予想できないことであった。

東暗黒星団帝国では上へ下への大騒ぎになっている頃だろう。

しかし、カザンには他人事であった。

要するに、大中間補給基地はカザンの指揮下ではなく、失われても彼の責任が問われることはなかったからだ。そして、地球占領軍には十分な物資の備蓄があった。当面、あれは無くても何とかなる。

それよりも重大な問題は、ヤマトに対する復讐戦を挑もうとする軍人が増えて来たことだ。

やり過ぎてヤマトを沈めてしまわねば良いが……とカザンは思った。

しかし、思っただけで口には出せなかった。

それは聖総統の作戦の最高機密に属することであり、そして秘密を維持するための思想警察はどこにでも隠れていた。うっかり口に出して言えばカザンも消されかねない。余計なことは言わないに限る。

あくまで彼らはヤマトを沈めるために追撃しているのだ。

語り部エヌは語った。

「敵中間基地を撃破殲滅したヤマトは、いよいよ待望の連続ワープに入った」

「連続ワープってなに？」

「複数のワープを連続して行うことで、一気に四十万光年を飛び越えるのだよ」

ヤマトは連続ワープに入った。

「ワープ五秒前！ 四、三、二、一！ ワープ」島がレバーを引いた。

ワープが終わると、そこはまだ目的地ではなかった。

既知宇宙の限界点までしかワープできなかったのだ。

その先はまだ見ぬ世界だった。

もちろん、目的地は目と鼻の先であるはずだった。

しかし、暗黒星雲が邪魔をして地球からは観測ができない場所だった。四十万光年を一気に飛び越えたヤマトであっても、最後の僅かな距離だけは飛び越えられなかったのだ。

会議室で真田は説明した。

「この星雲の直径は約一〇万光年ある。まったく発光しない星雲なので、その存在はいままで地球から観測できなかった」

「直径一〇万光年というと、我々の銀河系に匹敵しますね」島は考えた。

「うん。だが、中心部は星間ガス状物質が充満している。向こう側の光をまったく通さない。したがって、あの星雲の彼方に何が存在するのか永

遠の謎というわけだ」

「しかし、俺たちは行かなきゃならない」古代は当然のことを言った。

「星雲を突き抜けるにはかなり危険が伴う……艦長、連続ワープで迂回して行きましょう」島は提案した。

「それは無理です。直径一〇万光年の星雲を迂回するとなると、とてつもない時間が掛かり、重核子爆弾が爆発する前に敵母星到達が難しくなります」真田は説明した。ここ迂回に時間を食っては、全ての勝算が破綻してしまう。「しかも、この星雲の回転速度は、この通り、外縁に行けば行くほど、高速度になっています。ワープ中に、このスピードに引き込まれ、渦の中に巻き込まれてしまうかもしれません……そのほうがずっと危険です……」

「と、すると」島は納得するしかなかった。

「中心部は比較的回転がゆるやかだ。しかも、この中心部のどこかに、向こう側に続く通路の入口があるはずだ」

「よし！ 戦闘配備のまま突入せよ！」山南が命じた。事前に真田と古代が協議して決めた通りの方針だった。

「はい」一同がうなずいた。

ヤマトは通路の入口を探して暗黒星雲中心部に突入した。

しかし、状況は良くなかった。

「レーダー、反応しません！」サーシャが報告した。

「何っ?!」島が焦った。

「こちら球形レーダー室、レーダー反応停止しました！」西尾の報告も良いものではなかった。

「真田さん！ これは！」島は振り返った。

「ガス状物質が濃密になって、水に近いくらいの密度になった影響だ。それでも七宇宙キロ先は見える。これからは有視界航法をとるよりしょうがない」真田が自嘲するように言った。グレート・エンペラーも、いくら呼んでも現れない。グレート・エンペラーが出現する技術もレーダー同様

妨害されているらしい。

「有視界」古代はつぶやいた。

先手を取って攻撃できた大中間補給基地戦と違って、偵察機も飛ばせない状況でレーダーも使えないとなれば、今回は敵に先手を打たれてしまう。

そして、その懸念は現実のものとなった。

事前に接近を察知できなかった敵に撃たれたのだ。もっとも、これはヤマト側の怠慢とまでは言えない。もともと暗黒星団帝国のステルス能力は強力なのだ。そもそも、ステルス性能を持たない大中間補給基地と、ステルス戦闘艦は同じようには扱えなかった、

「敵だ!」狼狽した古代は叫んだ。「ユキ。左舷情報パネル、スイッチオン!」

狼狽ゆえに、古代は名前を間違えていた。

「違うわ」サーシャはむくれた。

「何が違うんだ! 急げ! ユキ! うっ。すまん。濡だったな」古代は謝った。間違いを認めてやっと落ち着きを取り戻した。「推定距離左舷前方一宇宙キロ! 各砲塔、戦闘態勢につけ!」

「島 左舷に濃い雲がある。その中に待避しつつ、全速で敵艦隊に接近せよ」山南は命じた。隠れる場所を検索する能力はメカ山南の方が優秀だった。

「うわあ」一同が撃たれた衝撃に悲鳴を上げた。

「敵艦隊、距離左舷前方一万宇宙キロ。ヤマト右舷ガス雲に突入」太田が報告した。彼は目の前のレーダーは見えていなかった。目視観測の報告だった。

濃い雲に突入したヤマトは暗黒艦隊から隠された。

追撃している暗黒艦の艦長が「砲撃中止」を命じた。

しかし、それはヤマトを見失ったことを意味しなかった。

暗黒艦隊のセンサーからヤマトは丸見えだったのだ。

ただ肉眼でヤマトが沈むところを見たいという子供っぽい理由で暗黒艦隊は砲撃を中断した。

そして、自ら囷となってヤマトを濃い雲から釣り出そうとしていた。

「二〇秒経過 敵艦隊との推定距離八千宇宙キロ」古代は報告した。

「第一、第二主砲。発射用意」山南が命じた。

「敵艦隊、左舷四十五度水平方向に最大接近」太田が敵艦隊の動向を報告した。

「右四〇度反転! ガス雲より離脱」山南が命じた。

「右四〇度よーそろ」島がヤマトの舵を切った。

「主砲発射」山南が攻撃命令を出した。

「主砲発射!」古代は復唱した。

敵が反撃してきた。

「コースターン 左八〇度!」島が進路を変えようとした。

「待て このまま撃つ」山南はそれを止めた。無理な位置だが十分に命中が狙えるというメカ山南の瞬間的な計算だった。

「主砲発射!」古代が更に主砲を発射した。

敵艦隊は潰走を始めた。

「どこへ逃げるつもりなんだ」古代は前を見た。

「行く先に、通路の入口があるのかもしれん!」真田は言外に追跡しようと言った。

「機関長! エネルギー増幅!」島が命じた!

「了解!」山崎が返事をした。「エネルギー増幅!」

「フルパワー噴射」島がレバーを引いた。

しかしヤマトは思いも寄らない方向からの射撃を受けた。

「ビデオパネル、スイッチ・オン」サーシャがその方向を表示させた。

「黒色艦隊だ!」古代が叫んだ。

「地球から追って来たんだ」司令部にいた相原らしい見立てだった。

ガリアデスのブリッジでカザンは叫んだ。

「今こそ聖総統のご命令に応える時が来た! 全艦に告ぐ。ヤマトを逃がすな!」

この命令は実は微妙だ。

いかにもここでヤマトを仕留めろとハツパをかけているように聞こえるのだが、実は【聖総統のご命令】とは、ヤマトをデザリアムに行かせることであって、ヤマトをここで撃沈することではないのだ。

そして、ここでカザンの艦隊が砲撃する理由は、間違った方向に進もうとしたヤマトの進路を変えさせることにあったのだ。「ヤマトを逃がすな」とは、意図しない方向に行かせるなという意味であった。

ヤマトでは被害報告が相次いだ。

「第三砲塔損傷!」

「左舷魚雷発射口損傷!」

「面舵三十度 小惑星の横に入り込め」島が必死に攻撃を回避しようと操舵した。

しかし、それはカザンの考えた通りの行動だった。

カザンはニヤリと笑った。「ヤマトが入りおったな。思うツボにはまってきたぞ!」

「何だ、あれは!」古代は思わず異様な光景に見とれた。

サーシャや山崎も声にならない声を上げた。

ゴルバ型浮遊要塞の大群が待ち構えていたのだ。

「浮遊要塞だ!」島が悲鳴を上げた。

「くそ 敵にはかられた」古代も悔しそうだった。

誘い込まれたのは明らかだった。

これらは、東暗黒星団帝国本土に続く回廊の入口を守護するグロータス麾下の浮遊要塞群だった。

彼らの任務は、適当に交戦した後で波動砲に負けたふりをして後退することであった。その後で二度とヤマトが地球に戻らないように回廊を封鎖する。そこまでが、彼らの任務だった。

「全要塞 砲撃開始せよ!」グロータスは命じた。

ヤマトの第1艦橋では誰もが狼狽していた。

「真田さん! こうなったら波動砲を使いましょう!」古代が言った。

「だめだ! 波動砲を使う時は全エネルギーを停止しなくてはならん。その間にやられてしまう!」真田が用意した新波動砲は、あくまでゴルバー基を前提にした装備だった。複数を相手に使える武器ではない。複数のゴルバが残存している状況下で、全エネルギーを停止して波動砲にエネルギーを充填するなど、自滅願望そのものであった。

「しかし、このまま座して死を待つよりも……」

「古代! 波動カートリッジ弾を使おう」

「え?」

「主砲のカートリッジの中に波動エネルギーが仕込んである。まだテストもしていないので使わなかったが」

「わかりました 艦長!」

それは艦長の裁可を求めるというよりも、同意を求める要求だった。

「うん。よろしい。島、あの要塞の裏に回れ 要塞を盾にする」山南が命じた。

「了解!」島がヤマトの進路を変えた。

「自分は第一主砲室へ行きます」南部は席を立った。

「うん」山南はうなずいた。

「波動カートリッジ砲用意!」古代が命じた。

波動カートリッジ砲とは、波動カートリッジ弾を発射可能に改造されたショックカノンに他ならない。

浮遊要塞では報告が上がっていた、

「ヤマト接近」

「破壊せよ」グロータスが命じた。

ヤマトの医務室では患者が悲鳴を上げていた。

「いてえ」

「こら、静かにねとらんか、馬鹿者が」佐渡怒った。
しかし負傷者は増える一方だった。

グロータスは歯ぎしりした。

「ヤマトめ! ゴルバの蔭に隠れたな!」

ゴルバの至近距離の特定の場所は死角になって撃てない。他のゴルバからも狙えない。ヤマトは絶妙な位置に入り込んだのだ。それはあたかも、グロータス自慢の要塞を欠陥品とあざ笑っているかのようであった。

逆上すると見境が無くなるグロータスの弱点が出た。

「かまわん あの要塞ごとヤマトを吹き飛ばせ! 空間重魚雷発射!」
命中するとヤマトは木っ端微塵だ。

それは聖総統の命令に反する措置だった。

サーシャが報告した。「敵超大型魚雷、接近!」

「くそっ。やつらはこの要塞を見殺しにする気だ!」島が叫んだ。

「よし! 波動爆雷連続発射!」古代が命じた。

波動爆雷が展開され、阻止網を構成した。

ミサイルはそこに突っ込んで次々と誘爆していった。

一方、主砲塔では南部が波動カートリッジ弾の用意を急いでいた。

「早くしろ!」南部は叫んだ。

ついに装填が完了した。

「発射」古代は命じた。

波動カートリッジ弾はゴルバに殺到した。

そして、一発が解放されたままの空間重魚雷の発射口から内部に入り込んで炸裂した。

グロータスが逆上して空間重魚雷を撃っていなければ、そこから入り込まれる可能性はなかった。完全に自滅だ。

しかもゴルバは次々と誘爆して崩壊していった。

ヤマトは勝利に沸いた。

「やった!」

「やった、あははは」

古代も喜んでいた。「たった二、三発でこれほどの大爆発が……」

「いや、こんな効果があるはずはない……」真田は考え込んだ。

「でも、凄い威力だったぜ」島が戦果を称えた。

「ひょっとすると、波動エネルギーと敵の何かのエネルギーが融合したのかもしれない……」真田が言った。

「波動エネルギーの熱効果じゃないんですか？」古代は疑問を口にした。

波動エネルギーの熱効果とは宇宙船内の空気が加熱され、船体が弾ける現象を意味した。特に波動砲で顕著に見られる現象だった。

「あの波動カートリッジ弾には波動砲の百分の一のエネルギーしか仕込まれていない」真田は否定した。

つまり、波動砲以上の効果を波動カートリッジ弾で引き起こすことはあり得ないのだ。

展望室では古代とサーシャが話をしていた。

「ごめんね、よくユキと間違えて。いつも、君の後ろ姿をユキだと思って見てるもんだから……でも、やつぱり君は君だ」古代は言った。

「そうよねね。叔父様を力づけられなくてごめんなさい」

「いや、君に会えてとても、うれしいよ……だが……」

「ユキさんがいなくてはだめなのね？」

「人間て不思議なもんだなあ。いなくなって初めて、その人の値うちがわかるなんて」

「どうしているかしら？ ユキさん……あたしも会いたかったのに……」

「あの時の状況じゃ、とても生きていたとは思えない……。でも、俺は信じてる！ ユキは生きている……きっと生きている」

サーシャには掛ける言葉もなかった。だから、古代が立ち去る時、その後を追うこともできなかった。

結局の所、サーシャは恋に破れたのだ。

古代進がサーシャに注目したのは森雪の面影があるからで、完全に別人

と認識された今、完全に古代進は他人との境界線の外側、他人になってしまったようだ。

古代が立ち去った後でサーシャも展望室を去ろうと思った。

その時、展望室に亡霊のような女性が出現した。

「お話しがあります」

「あなたは誰？」

「イスカンダルのスターシャ。あなたの母親です」

「幽霊……」

「幽霊ではありません。イスカンダルには死者の意志を保存し空間に姿を投影する技術があります」

「嘘。私には真似ができないわ」

「いえ。あなたにもできます。いえ、できねばならないのです」

「どういうことですか？」

スターシャが真実を語り始めた。

全てを聞き終わったサーシャは涙ぐんだ。

「一年で大人になった私は一年で老いさらばえて死ぬのですね？」

「ええ」

「ではどうすれば良いのですか？」

「老いさらばえた醜い姿を愛する人に見せず、美しい思い出のまま残したいと思うなら、愛する人を助けて死ぬのです。できるだけ早急に」

「他に手は無いのですか？」

「ありません」

「お母様。私が死ぬべき場所はどこかにありますか？」

「これから古代とヤマトは最大の危機に飛び込むことになります。あなたは、そこから古代とヤマトを救うことができます。あなたの命を代償に」

サーシャは涙を拭いて、本気の目になった。

「方法を教えて下さい」

サーシャが死を決意した瞬間だった。

地球のアルフォン邸。

どこか遠くで何かが爆発していた。

アルフォンは言った。

「また、パルチザンか……地球人もよく粘るな。ユキ、君はなせ僕の所から逃げないのだ？ なせパルチザンの仲間に入らないのだ？ 君も地球防衛軍の第一級の戦士なんだろ？」

「ご恩があるからです。傷を治していただきました」

「ハッハッハ、嘘をつくんじゃないよ……君は僕が技術部の情報将校だと知って重核子爆弾の解体の秘密を探ろうとしている。違うかい？」

「……」

「教えたっていいんだよ」

「えっ?!」

「やっと本心を見せたね。知りたければいつでも……。一つだけ僕の望みを叶えてくれるなら。君が僕の愛を受け入れてくれるならば……」

「待ってください！ お願いします。もうすこし時間を……」

情報を狙ってアルフォンを狙っていたはずの森雪は、今や愛の力でアルフォンに追い詰められていた。

しかし、事態はもう少しややこしかった。

アルフォンが当初望んだのは恋愛ごっこでしかなかった。

自軍にいたら絶対に手の届かない高値の花の女と親しくなるという夢のような事態を地球人相手に叶えてみるという遊びだった。

愛を受け入れれば重核子爆弾の秘密を教えるというのも、遊びの延長線上だった。彼にはそんなものを教える気はなかったのだ。適当に嘘情報を掴ませて、はるかにレベルの高い女と深い関係になる……。その程度のことしか考えていなかった。

だが、真剣に思い悩む森雪を見ているうちに、アルフォンの気持ちが揺らいだ。

森雪だって、アルフォンと同じように嘘を付いて情報をせしめれば良か

ったのだ。

しかし、愛に関して森雪は誠実すぎた。

ヤマトはついに回廊を発見した。

「こちら球型レーダー室。暗黒星雲中心部の通路を発見。方位左にふたまる。現在位置からの距離一万宇宙キロ」西尾の報告だった。

「見つかったか」古代は喜んだ。

「艦長! ただちに入口に向かって前進したいと思います!」島が艦長を振り返った。

「よし、全速前進せよ」山南は命じた。

「ヤマト、中心部に向かって、最大戦速へ」島がレバーを押した。

しかし、話は簡単ではなかった。

センサー類は妨害され、視界も悪かった。

岩塊も多かった。

「島、もう一度、航路探査だ」山南は命じた。

しかし、何度やってもダメなものはダメだった。

ヤマトに岩塊が衝突して衝撃が走った。

「うわっ」古代が悲鳴を上げた。

「ああっ」サーシャもだ。

「し、島。何やってんだ」古代は隣の島に叫んだ。「どうしたんだ、島」

しかし島も必死だった。

「機関長! エネルギー増幅!」島は叫んだ。

「了解。エネルギー増幅!」山崎は復唱した。「フルパワー噴射」

「伝導回路故障! これ以上増幅できません!」太助が機関室から返事をした。

「太助。早くしろ」山崎が叫んだ。

「分かっていますよ。そんなこと言ったって」太助はむくれた。

「このままじゃ、敵よりもあの岩にやられてしまうぞ! 何とかならないのか! 島!」古代は言った。

「だめだ! レーダーも機能しないし、視界もきかない!」

「濡、ビデオパネル、スイッチ・オン!」古代は命じた。真田濡がサーシャであることは秘密だから濡と呼んだ。

「はい。ビデオパネル、スイッチ・オン」

「なんだ、これじゃ何も写らないのと同じだ」島が愚痴った。

「左舷前方に岩塊発見!」サーシャが言った。

「え?」島が驚いた。

「濡! どうしたんだ? 何も見えないじゃないか」古代も驚いた。

「島、濡の言うとおりに操縦してみろ」真田がアドバイスした。サーシャを育てた真田は、こう言うときに冗談を言う性格ではないことを知っていたからだ。そして、おそらくスターシャはイスカンダル人の秘密の全てをまだ真田に語っていない。真田は何かあると推定したのだ。

「右三十度反転」島が操縦桿を倒した。「ああ」

その直後、行きすぎる岩塊が見えた。

そのまま直進していたら激突していたところだ。

「濡のやつ、透視術でも使えるのかな?」南部が囁いた。

「うふ」とサーシャは少し得意げだった。

ここで発動させたのは、サーシャモデルのイスカンダル実働部隊員が持つ遠隔視覚の能力だった。

母であるスターシャから全ての事情を明かされた際に、サーシャ自身が持つ特殊能力の使い方も伝授されたのだ。

スターシャの遠隔視覚は数万光年以上先の光景も見通すことができ、イスカンダルにいながらにして地球の惨状を知ることもできた。サーシャの能力はそれに大きく劣ったが、それでもヤマト乗組員の誰よりも強力な視覚を持っていた。

しかし、今ここで小さなヒーローになることは、近い将来待っているサーシャの死を前にした小さなご褒美に過ぎなかった。

「右舷上部から岩塊!」サーシャは見たものを報告した。

「左三十度反転」島は操縦桿を倒した。

「出口だ! 一気に抜けるぞ!」古代が出口を発見した。サーシャはとっくにそれに気づいていたが、発見の報告は古代に譲った。

語り部エヌは語った。

「そこはめくらめく光に満ちあふれた神秘の宇宙であった。四十万光年の旅の終わりにヤマトの乗組員達の目の前に広がった世界。それは、未だかつて地球人類が予測想像することすらできなかった宇宙が遙か無限の彼方まで広がっていた。未知なる宇宙空間を進むヤマト。その彼らの後には暗黒星雲が渦巻いていた。それは、まさしく二重銀河であった。暗黒星雲が織りなす黒色銀河と、きらめく光芒の充満する白色銀河が重なり合い、まざまざと宇宙創成の神秘と驚異を見せつけていた」

「待ってよ」と子供達が言った。

「何かね?」

「暗黒星団帝国は暗黒というぐらいだから、暗黒銀河の帝国じゃないの? なんで白色銀河に行くの?」

「良いことに気づいたね。でもね、ヤマト乗組員は気づかなかったのだよ」

「どうして?」

「二重銀河の情報を何も持っていなかったからさ」

ヤマトの艦橋では古代が光点を発見していた。「あの光点は何だ?」

「敵の母星かも知れんな!」島が感想を述べた。

「島、あの光点に向けて小ワープせよ」山南が命じた。

「了解!」島が言った。「ワープ!」

もちろん、その行動は余りに意味が無かった。

光っているから敵母星ということもあるまい。

しかし、他に何も手がかりがなかった。

サーシャの遠隔視覚でも、これだけ広大な空間は見通すことはできなかった。

ならばスターシャならばどうかと言えば、死者となったスターシャには既に数万光年以上を見通す力は残っていなかった。

光点は、事実上、ヤマトを東暗黒星団帝国が意図した通りに誘導する灯台の光であった。

ワープが終了すると地球そっくりの惑星があった。

一同はどよめいた。

「これは……?!」太田が叫んだ。

「地球だ!」相原の感想はみんなの感想だった

「島! 地球に戻ってしまったのか」古代は慌てて隣の島を見た。

「いや、そんなはずは……」島も戸惑っていた。「航海班! 航路計算はちゃんとやったのか」

「再チェックしましたが、計測に間違いありません」

「航路測定に間違いのないのに、どうして地球へ戻ってるんだ?! 島!」古代は文句を付けた。

「濡、パネル・チェンジ!」真田が命じた。「みんな見てくれ。この星の主要部分を映しだしてみる」

それは見覚えのある遺跡などの風景だった。

「ち、地球だ! 本当に地球に戻ってしまったんだ」古代が叫んだ。

「いや。それにしても戦火の跡がまったくない。占領軍の姿も見えないし、都市の様子もまるで違う」島が冷静に違和感を表明した。

「でも、あの遺跡は地球以外では考えられませんよ」相原がそれも正論を言った。

「ああ、そのとおりだよ」古代は相原に同意した。

「古代」山南が声をかけた。

「はい」

「先発隊のメンバーを選出してくれ」

「先発隊?」

「うん。攻撃もしてこないようだし、着陸して様子を探ってくれ」

「わかりました」

これがメカ山南のメカ山南らしい判断だった。

独創性のある決断はできない。

分からないことがあれば、まず調査するのがメカ山南のやり方だった。

そして誰もそれよりマシンなアイデアを持ち得なかったので先発隊が出発することになった。

こう言うとき、迷わない、悩まないメカ山南は人間達をリードする存在になれた。

地上に降りた一行は辺りを見回した。

「綺麗な星だな」古代は感想を言った。

「ゴーストタウンだな、まるで」相原の感想は違った。

「おい、古代」島が呼びかけた。

「なんだ」

「どうもこの様子は、地球とは違うようだぞ」

「おまえ、まだ」

「もっと先へ行ってみよう」

何かが建物の中で動いた。

「何っ」古代はそれに気づいた。

「人が来ます」太助が指さした。

「女だ」南部が叫んだ。

「お迎えにあがりました。聖総統がお待ちかねです」謎の女、サーダは言った。

「聖総統?!」古代には初耳だった。

「教えてください。地球なんでしょう？ここは？」相原はいきなり核心に踏み込んだ。

「聖総統にお会いになればわかります。こちらへ」サーダは案内した。

サーシャはその時気づいた。

サーシャタイプより前に存在したサーダタイプの遺伝子を持つ人間に違

いない。

サーダタイプに関しては、母親のスターシャから聞いていた。

しかし、向こうはサーシャに気づかなかった。当然だろう。サーシャ自身、サーシャタイプの遺伝子の割合は低いし、古いサーダタイプなら、より新しいサーシャタイプの知識はないかも知れない。

ヤマトではアナライザーからの連絡が届いていた。

「艦長、アナライザーより一報です」太田が報告した。

「うん。ビデオパネルに切り換えてくれ」山南が指示した。

それは自分が見るためと言うよりも、みんなに見せるための指示だった。

地下では聖総統と名乗る男が待っていた。

「ヤマトの諸君、よくぞ来られた。我々は諸君を第一級の賓客として迎えることにした。安心せられよ」

「じゃ、敵ではないと言うのか」島は少し警戒を解いた。

「だとしたら、どうなってるんだ、これは」古代も混乱していた。

「さて、諸君。さっそくご鑑賞いただいた我々の音楽はいかがだったかな?」

「あなたがたの音楽?」島が、首を傾げた。どう聞いても地球のクラシックだ。

「さよう。この星の何世紀も前の古典芸術だ」

「えっ?!」

「古典芸術?」

古代は心の中で呟いた。「ここはやはり地球なのか? だとしたら、いつたい、いつの時代の……」

「君たちが疑問に思うのは当然だ。この星は君たちより二〇〇年未来の地球なのだ」

「地球?! 二〇〇年未来の?」古代は驚いた。

「そうだ。二〇〇年未来の地球はこのように暗黒星雲に覆われてしまっ

たのだ」

「やっぱり地球か」相原は納得した。

「どうりで都市のようすが変わってると思った……」南部も受け入れた。

「古代、どう思う、おまえ」島が疑問を古代にぶつけた。

「古代さん。地球も二〇〇年経つとこうなんですか？」徳川もだった。

聖総統は笑った。「分かったかね。諸君。ま、ゆっくりくつろいで、君たちの歴史でもご覧頂こう」

サーダは飲み物をもってきた。「どうぞ」

ヤマトの歴史が上映された。しかし、最後に【西暦 2402 年。宇宙戦艦ヤマト遂に帰還せず】のテロップで終了した。ヤマトの最期以外は間違いなく本物の記録映像だった。ヤマトの最期は、数ヶ月前に地球に来た宇宙からの観光客に贈呈されたヤマトのレプリカを近傍宇宙で爆破する映像であったがそこまで気付く者はいなかった。

相原が声を上げた。他の者達もだ。

「あれがヤマトの最後か」相原は悲鳴を上げた。

「ヤマトは地球へ帰れないのか」南部は今にも頭を抱えそうだった。

「そ、そんな馬鹿な！」太助は呆然とするばかりだった。

「でたらめな歴史はやめてもらいたい！」島は抗議した。

「これが真実のヤマトだ。二二〇二年の地球には帰れないのだ。君たちがただ一つ生きのびる方法は、このまま降伏してこの星に永住することだ」

「ではうかがおう」古代は質問した。「この星が未来の地球だとしたら、何のために重核子爆弾を打ち込んだのです。あれ一発で地球人類は滅亡してしまうでしょう？ 自らの過去を抹殺してしまえば、現在のあなたがたも消滅してしまうことになるのだ」

「そのとおり。我々が自らの祖先を抹殺するわけがない。あれは、聞きわけのない一部の人間に対する脅しにすぎない」

ヤマトではアナライザー経由でその言葉を聞いた山南が表情を変えた。

「脅し？」

脅しだとすれば、主旨が一貫しない。

メカ山南の論理回路が聖総統の言葉を信用できない結論づけた。

聖総統の話は更に続いていた。

「しかし、ヤマトの歴史はこの航海で終止符を打っているのだ。悪いことは言わない。この星に残って生きのびる道を選びたまえ」

「いや、ヤマトは帰る！ あなたがたがああ重核子爆弾を使うことかできないとわかった以上、もうここにとどまる必要はない。あの前衛艦隊を追い出し、もとの平和な地球に戻してみせる！」古代は見得を切った。

「たわけたことを……すべては歴史が証明しているのだ。いくらあがいても、君たちは君たちの運命の糸から逃げることはできないのだ」

「いや、我々の運命は我々の手で切り拓いてみせる！」

「うふふふふ。はははははは、過ぎてしまった歴史を戻すというのかね？ やれるものならやってみるんだね、ヤマトの諸君、はははははは」

それは不自然な挑発だった。説得する気など微塵も無い。むしろ、敵として嫌われたがっているかのように笑っていた。

「くそ」

「古代」島が言った。「やめろ、古代」

一同は戻るしかなかった。

「うーん」徳川は【考える人】を前に考え込んでいた。

「徳川！ 何をしてんだ！ 早く来い！」古代はうながした。

「は、はあ」徳川はしぶしぶ移動した。

一同が地上に出るとサーシャは立ち止まった。

美しい記憶として残りたいとすれば、ここで地球のために我が身を犠牲にするしかない。そのことは分かっていた。それに、ここで死ぬのはイスカandal人の運命でもある。醜態は晒せないのだ。

それでも迷いはあった。

だが、もう決断するしかなかった。

迷いを吹っ切るのは割と簡単だった。

先行する古代進の背中を見るだけで良かった。

そして、このまま後に付いていった場合の成り行きと、ここで死んだ場合に残る古代の中の思い出を比較するだけで十分だった。

もうここで死ぬしかない。

だが、それを古代進に悟られるわけにはいかない。

「さあ、濡、急いで」古代がうながした。

しかしサーシャは動けなかった。

「どうしたんだ？ 濡」

それでもダメだった。。

「さあ。濡」

「あたし」サーシャは言った。「あたし、残る」

「えっ?!」

「濡！ 待ってくれ！ おい！ サーシャ！」

「さ、サーシャ?!」相原が驚いて振り返った。彼は真田濡だと思って彼女を見ていたのだ

「サーシャ！」古代は叫んだ。「サーシャ、サーシャ……冗談だろ？ 残るなんて」

「いいえ、本当よ」

「何だって？」

「私の体は半分宇宙人。今の地球より二〇〇年後のこの星の方が住みいいの」

「本当のことを言ってくれ、サーシャ。君は何か隠しているね？」

「一緒に帰れだなんて……私と一緒に帰れだなんて……あなたには……ユキさんが……」

「……サーシャ……」

「あなたの心には、私の入り込む……。叔父様ですものね。はじめから分かってたの。わたし。さようなら！」

「サーシャ！ サーシャ……！ サーシャ！ サーシャ！」

「来ないで。すこしでも私が好きなら、追って来ないで、叔父様！」

「サーシャ！」

サーシャは地下に戻って行った。

「サーシャ……」古代は落胆した。

地球のアルフォン邸では森雪が古代を思っていた。

「古代くん」

「久しぶりに静かな夜だった……パルチザンもたまには休息することもあるようだな」アルフォンが雪に近づいた。

「あ」

「なんだい、ユキ」

「この間、おっしゃってくださったことですけど……。あなたのお気持ちを、私、お受けしても……」

「ユキ、美しい人だ、君は……地球人はそれほどまで、愛する人のことを考えるものなのか……。ユキ、君は死ぬつもりだね？ 私から重核子爆弾の秘密を聞き出したあと、仲間に伝えて、死ぬつもりなのだ 何も言わなくてもいい。私にはわかる……君の心の中には古代という男しか住んでいない」

「……あの人は……死にました」

「だが、君は信じていない！ 君が信じているのは、古代が活着ているということだ。地球のためにあくまでも戦い抜こうとしている男の命だ」

実はこの時、アルフォンは連絡艇に生命反応が無かったという話が欺瞞情報であることを知っていた。つまり、森雪も何らかの方法で同じ情報を得ているに違いないと考えていたのだ。

「でも、私……私は……爆弾の秘密が知りたい！……そのために地獄に墜ちてもいい！ ううう」

「仲間のところに帰りたまえ。そして、私を攻撃してくるのだ。私を倒すことができたら、その時にこそすべてを話すよ」

アルフォンは、この作戦が嘘と欺瞞に満ちていることに気づき始めていた。

それ故に、知っていることを全て暴露する意志が固まりつつあったのだ。

一方のヤマトでは、メカ山南を囲んで方針を相談しているところだった。

「帰りましょう、地球へ」古代は明快だった。

「だが、古代、ヤマトはこの暗黒星雲の中で敗北する運命ではないのか？それは歴史ではないのか？」メカ山南が疑問を呈した。

「歴史が何です。僕たちは今生きているんです。つぎの瞬間も生き続ける権利があるんです。万に一つの可能性を求めて、生き抜くためにすべての努力を傾けるのが人間なんじゃありませんか？」

「うん。その言葉を待っていた」メカ山南はうなずいた。メカ山南は待っていたのだ。なぜなら、メカ山南は既に結論を出していたが、その結論はメカ山南自身が決断可能な水準を超えた問題だったからだ。そして、古代の決断はメカ山南の判断と一致した。メカ山南は前進可能になったのだ。

「全員部署につけ！ 発進準備だ！」

「ヤマト、地球に向け発進！」古代は命じた。

サーシャは地上に出てヤマトを見ていた。

サーシャは泣いていた。

そこにスターシャの幻が投影された。

「サーシャ」

「お母様！」

「サーシャ、私の娘……イスカンダルと地球の間に生まれた運命の子。悲しくても我慢するのはですよ。あなたの悲しみはあなたに与えられた定めなのです。つらいでしょうがわかってください。そして、サーシャ、あなたの役目を果たすのよ。お母様はあなたを見守り、すべてを終えて私の許へ戻ってくる日を待っています」

「お母様……」

「泣いてはいけません。さあ、笑いなさい。そして手を上げて、進とヤマトにさよならをお言いなさい」

「お、お母様！」

「どうしたのです、サーシャ。ヤマトが去っていきます。手を上げて」

「お母様」

「サーシャ、手を上げて」

サーシャはゆっくり手を上げた。

「そうです。もっと手を上げて。涙を振り払って、さよならを」

「さようなら、ヤマト……。さようなら、ススム」サーシャは手を振った。

これでサーシャはヤマトと古代進と永遠に縁が切れることを覚悟した。

ヤマトでは古代が同じような境地に達していた。

「忘れないよ、絶対に、サーシャ」

地下では聖総統が不敵に笑っていた。

「愚か者め、無事帰れると思っているのか。たった今見せた歴史のとおり、葬り去ってやれ!」

そうだ。聖総統はヤマトを帰すわけにはいかないのだ。

そして、このままでは葬り去られるという状況まで追い詰める必要があるのだ。

最後の切り札、波動砲を使用させるために。

パルチザンの地下アジトに森雪は入った。

「あ、ユキだ!」

「森ユキだ!」

「生きていたのか!」

「ユキ!」

長官も喜んだ。「ユキ!」

森雪が報告した。「連絡艇発進の際、負傷して地球に残りましたが、もうすっかり治りました。私も戦いに参加させてください」

長官はうなずいた。「うむ、力を合わせて頑張ろう」

森雪は決め手を欠いていたパルチザンには力強い援軍に見えた。
だが、ずっと暗黒星団帝国将校の愛人だった森雪を信用していない者達も多かった。

それも、森雪がもたらした多くの内部情報を知ると顔色が変わった。
パルチザンでの森雪の立場は藤堂長官の秘書であったが、実行部隊のリーダー格になるまで時間は要さなかった。

第4章 母星

ヤマトの前に巨艦群が出現した。戦艦グロデーズだ。

「敵、大形戦艦接近。ヘビー級です」太田が叫んだ。

「やっぱり」島がうなった。

「総員戦闘準備！」山南は命じた。

「総員戦闘準備！」古代が復唱した。

グロデーズの艦橋で指令が命令した。「全艦、戦闘準備。目標ヤマト、攻撃開始！」

激しい交戦が開始された。

「第一砲塔損傷！」

「やはり、これが運命なのか！」相原が言った。

「機関長！」太助が第1艦橋に現れた。被弾で艦が揺れた。「おととと、機関長」

「こら、勝下に部署を離れるな！」山崎が叱った。

「考える人が変なんです！」

「考える人?! 何だそれは？」

「宮殿の廊下にあったロダンの「考える人」は左手を顎に当ててポーズを取っていましたが、ほら、本物はこうなんです。右手でポーズを取っているんですよ」

「何だって」古代が驚いて振り返った。

「みんな聞いてくれ！ 奴らの星は我々の未来なんかじゃなかった！ 全ては我々をだます手立てだったんだ！」真田も第1艦橋に戻って来た。

「だますだって?!」島が叫んだ。

「このグラスはあの星の宮殿から相原が持って来たものだが、指紋がついていない」

「指紋?!」古代は驚いた。

「案内してくれた女が運んできたそうさ。本当なら指紋が付いているはずだ。やつらは我々の子孫じゃない。地球人類じゃないんだ!」

厳密に言えば、彼らは機械の身体にしているから指紋が無いのであって、種族はあまり関係がなかった。そのようなことは、当然真田は承知していた。つまり嘘も方便だ。実際は、グレート・エンペラーから得た情報を元に種族を判定してただけだ。グレート・エンペラーとの関係は秘密だったので、本当の根拠を明かせないので適当な理由をでっちあげただけだ。ただ、グレート・エンペラー本人との連絡はまだ回復していなかった。過去の得た情報を利用して種族を判定しただけだ。

「徳川の言った彫刻も、あの絵もみんなにせ物だったのか」島が悔しそうに言った。

「それじゃ、あの歴史もでたらめだったんですね!」南部も叫んだ。

「そうさ。俺たちをだまして、降伏させるつもりだったんだ」島がまとめた。

「良かった! 俺たちは地球へ帰れるんだ!」相原が安堵の表情を浮かべた。彼は割とヤマトがやられる話を信じていたようだった。

「そうとなったら、みんなに報告だ」太助は機関室にとって返した。

「島、真田さん」古代は言った。「地球の未来だということが嘘なら、地球人類を滅亡させても一向に構わないわけだ!」

「うん。となれば奴等は」真田はうなずいた。

「地球にある重核子爆弾を使うかもしれない!」

「その通りだよ、古代、ただちに重核子爆弾のコントロール機能を停止させなければ!」

「うん」山南はうなずいた。「島、コースターン!」

「ヤマト、一八〇度反転! 目標! 敵母星!」島はヤマトの進路を変えた。

「くそ。全艦追撃」急な進路変更にグロデーズの指令は慌てた。彼らに波動砲を撃たせるまでヤマトを追い詰める必要があるのに、急な進路変更で距離を取られてしまった。先回りするしかない。

パルチザンはトンネルを掘り、重核子爆弾を襲撃していた。

空間騎兵隊員の犠牲で突入できた森雪を待っていたのはアルフォンだった。

「ユキ、私を撃てるか？ 私を倒すことができれば、その時こそ重核子爆弾の秘密を教えてやろう」

森雪は撃つことをためらった。

「撃てまい。だが、私は君を見逃すわけにはいかない。撃つ」

しかし、倒れていた空間騎兵隊員が森雪の代わりに撃った。

「ああっ。うあああ」アルフォンは倒れた。

「アルフォン少尉!」

「はあっ。はあっ」

しかし、傷口からは機械が見えていた。

「あなたは……あなたがたはロボット……」

「違う……顔を見たまえ。血が流れているだろう？ 私はサイボーグだ。首から上だけが本物の肉体で、体は全部作り物さ。私たちの星は、あまりにも機械文明が進みすぎ、人間は脳だけあればあとは何でも機械でやれるようになったのだ。だか、生物として肉体的には退化してしまった……地球人より高等生命体だが、人類の種としての生命力は衰弱してしまったんだよ」

「それで、あなたがたは地球へ……」

「そうだよ、地球にはまだ若々しい生命が充満している。我々が地球に来たのは地球人の健全な肉体が欲しかったからだ……大地を踏みしめる足が欲しかったのだ。ユキ、君を心から愛していた……」

それは彼が知る最大級の機密情報であり、語るためにアルフォンはかなりの勇気が必要とした。そして、森雪からすれば驚愕すべき真相だった。

二人とも、それが欺瞞のために流布された情報に過ぎないとはこの時気づかなかった。

「アルフォン少尉!」

「ユキ……最後の望みをかなえさせてくれ……私の頭を膝の上に抱いて欲しい……」

雪はその願いを叶えた。

「約束を忘れてはいないよ。ユキ……この重核子爆弾は起爆装置だけ解体してもだめだ。かといって、本体のコントロール装置を破壊しても、自動的に起爆装置が働いてしまうのだ。従って、まずここの起爆装置を解体し、しかる後に本星のコントロール装置を破壊せねばならない二重構造になっている。これがその解体図だ」

「アルフォン少尉……」

公平に見てアルフォンは誠実であり、彼が信じる「事実」を森雪に語っていた。森雪を愛してしまったことは事実であり、愛する人に嘘がつけなかったことも事実だろう。しかしながら、下っ端の傍流の将校であるアルフォンがどこまで機密情報にタッチしていたのかと言えばそれは別の話だ。

技術部であるから機械に関する話は間違っていなかった。

事実として、彼が教えた通りの手順で地球の起爆装置は解体できた。

だが、健全な肉体が欲しかったから地球に来たという言い分は、明らかに東暗黒星団帝国の行動意図を秘匿するプロパガンダそのものであった。

それは、技術部の将校待遇の技術者クラスでは十分に機密情報の秘匿ができないから開示できない、という判断そのものだった。

事実として、機械の身体を持つ暗黒人の男達は男としてはハイスペックであり、生身の身体しか持たない地球人の男達は多くの地球女性達のハートを暗黒人に奪われつつあった。

このような状況で誰が生身の身体を望むというのか。

あくまで古代進への純愛を貫こうとした森雪はその意味で特異であり、アルフォンの心を捕らえてしまったのだ。

しかし、森雪は特殊な例外であり、やはり暗黒人の機械の身体は有利な

存在であった。

事実として、ほとんどの暗黒人は生身の身体を欲しがってすらいなかった。

その事実にはパルチザン達が気づくのは、もう少し先のことだ。

ヤマトでは真田が敵の動向をチェックしていた。「敵戦艦は母星の援護に回っている」

そして振り返った。「艦長、エネルギー充填の時間が十分にあります。新波動砲を使って一気に撃滅しましょう」

提案の形を取っているが事実上の命令だった。

「母星の位置は」メカ山南は手順通りに安全確認を優先した。

「この位置からだ、左六十度、艦体より上下角五度。サーシャのいる母星には影響ありません」真田は答えた。

「よろしい、新波動砲への回路を開け！」メカ山南は命じた。

「了解。回路を開きます！」山崎が回路を開いた。

「波動砲セーフティーロック解除」古代が安全装置を解除した。

一方で、聖総統の間では、サーダが報告していた。

「聖総統！ ヤマトは我々の芝居に気づいたようです！ この星の鉾物組成がヤマトの波動砲にもろいのになさされます！」

「心配無用、我が無限ベータ砲を見るが良い。全艦ヤマトにとどめを刺すのだ！」

作戦の詳細を開示されていないサーダは心配していたが、心配無用だった。なぜなら、ヤマトの波動砲に撃たれることこそが本来意図された結末だからだ。

聖総統の計画はこうだった。

グロデーズ艦隊で最後の戦いを挑むが、グロデーズ艦隊は潰走する。

残存グロデーズ艦隊は水晶都市に逃げ込もうとし、ヤマトはそれを追ってデザリアム内部に入り込む。水晶都市ごと波動砲を撃って聖総統の目論

見は達成されるわけだ。

しかし、サーダの意見に耳を貸すべきであった。波動砲と偽地球の鉱物組成が合成されてグロデーズ艦隊に予定外の大ダメージを与えて壊滅させてしまう未来に、聖総統はまだ気づいていなかった。

ヤマトでは山南が指示を出していた。

「波動砲発射用意！ アフターバーナー点火。シリンダーへの閉鎖弁、オープン」

「閉鎖弁オープン」太助が閉鎖弁を開いた。

「エネルギー充填八十パーセント」山崎が報告した。「エネルギー充填百パーセントへ」

「ターゲットスコープ、オープン！」古代がスコープを開いた。「電影クロスゲージ、明度九!! 目標前方戦艦! 距離五万! 発射一〇秒前、対ショック、対閃光防御! ……六、五、四、三、二、一、発射!」

だが発射された波動砲は、グロデーズ艦隊のみならず、偽地球も破壊し始めていた。波動砲のエネルギーと偽地球の鉱物組成が融合して更に大きなエネルギーを生み、残存したグロデーズ艦隊も巻き込んでいった。そして、偽地球全体が崩壊を始めた。

「敵の星が」古代が叫んだ。「あの星にはサーシャが ……サーシャが」

「そうか 波動エネルギーと母星のエネルギーが融合して爆発したんだ! ……なぜ なぜ早く気づかなかったんだ」真田は悔やんだ。

崩壊する偽地球には、謎の女の姿が投影されて悲鳴を上げていた。

偽地球を構成する幻影を産み出していた地球人だった。

彼女は東暗黒星団帝国の先遣隊に捕獲されてすぐに死んだが、死者の意識を維持する装置でずっと意識を永続して記憶から地球の姿を再現し続けていたのだった。

東暗黒星団帝国の侵攻に先だつて地球を訪問した善意の宇宙人は、実際にはこの東暗黒星団帝国の先遣隊だった。彼らは観光にかこつけて宇宙戦艦ヤマトを始めとする各種情報を収集し、目立たないように少数の人間を

拉致すらしていたのだ。

その成果は極めて高いレベルで再現された偽地球として結実していた。
問題は一つしかなかった。

いつもガラスに反射した【考える人】しか見ていなかった彼女は、正しい向きの【考える人】を再現できなかったのだ。

偽地球の崩壊が一段落するとその中から奇怪な形をした天体が出現した。

「あれは!」相原が叫んだ。

「一体どういうことなんだ!」島もうめいた。

「真田さん」古代は振り返った。

「あれが本体だ。地表は見せかけの都市だったのだ。あの中心部の核からエネルギーを取っていたんだろう。あの巨大なパイプも中心部の表面も、超金属からなっていて、新波動砲をもって、決定的なダメージは与えられない」真田はうっかりグレート・エンペラーからもたらされた超金属の話の口にしてしまい後悔した。しかし、誰もそのことには気づかなかった。決定的なダメージは与えられない、という結論の方が衝撃的だったからだ。

「新波動砲でも効果がないなんて!」

これが敵母星、デザリウム星の真の姿だった。いや正確には、敵はそれを母星の真の姿だと見せつけ、ヤマト乗組員達はそれをデザリウム星の真の姿だと思い、呆然とみていた。現実問題として、それは天体としては極めて不自然であり、実際には超大型爆弾そのものだった。

だが、不自然な天体を見慣れたヤマト乗組員達はそれに気づかなかった。そして、不自然さに気づく時間的猶予は彼らに与えられなかった。

「濡だ! 濡がパネルに!」太田がパネルを指さした。

「えっ?!」古代はパネルを見た。「無事だったか、サーシャ!」

「ここまでは敵も予測していたらしくて、この星の人は誰も傷ついていません」

サーシャは、遠隔視覚で崩壊した地区には誰もいなかったことが分かっていた。しかし、それしか確認しなかったのは若さ故の盲点だった。実際には内部の水晶都市にも人はいなかったのだ。

「なに？」

「この星は空洞惑星なのです。内部の空洞の中央には、巨大な人工都市があります。私が南極のパイプを開けますから、内部に突入し、人工都市中心部に波動砲を撃ち込んでください」

「サーシャ、わかった！ 人工都市中心部だな！」

「ヤマトの波動エネルギーと都市中心部のエネルギーが融合して、あの球体自体が自己崩壊します」

その認識は間違っていなかった。問題は、【球体自体が自己崩壊】が更に多くの爆弾に点火する装置に過ぎないことにサーシャが気づいていないことだった。しかし、それは他のヤマト乗組員達も同じだった。

「そうか！ だから彼らはヤマトを怖れていたのか！」メカ山南は論理的な結論を得た。論理的だが間違っていた。彼らはヤマトを怖れていたのではなく待っていたのだ。

「そうです」サーシャはうなずいた。「それしか、この球体を撃ち破る方法はありません。都市地下のエネルギーが誘爆するまでに九百宇宙秒。その間にヤマトは北極のパイプから脱出してください」

「待ってくれ、サーシャ！」古代は遮った。「君はどうするんだ！ そんなことをしたら、今度こそ君の命は……」

「聖総統が、重核子爆弾のスイッチをいつ押すかわかりません……。ですから、ですから、早く！」

戦況が悪くなれば総員退去が終了する前にスイッチを押してしまうかもしれない。サーシャはその可能性を指摘したのだ。

「さ、サーシャ」古代はうめいた。

「古代、サーシャは今のことを探るために、敵の星に残ったんだ」真田が言った。

「真田さん。真田さん、南極へ突入したら、サーシャの命は……」

「しかし、それ以外にあの球体を撃破する方法がないとしたら……」真田は考え込んだ。情報は貴重だが、サーシャを犠牲にすることは育ての親としての真田の心を痛めた。

「突入しましょう。そしてまずサーシャを救い出すんだ。波動砲の攻撃はそれからだ」島が玉虫色の解決策を出した。デッドロックして立ち止まるより、玉虫色の解決策でも先に進んだ方が良いからだ。

だが、既に聖総統は最後の決断を下していた。

聖総統は告げた。「ヤマトよ。悪あがきはやめたほうがよい。今、私がこのスイッチを押すと、地球時間五分以内に重核子爆弾が爆発する。そして、地球人類は死滅することになる。諸君、考え直して私に降伏したまえ。あと五分待とう」

この勧告は、実はおかしい。

なぜなら、聖総統は五分待つと宣言したが、その間にヤマトが波動砲を撃つてしまえば地球側の勝利となるからだ。サーシャの命を犠牲にするだけで良い。聖総統が勝利を確実にする方法とは言えない。

しかし、裏を返せば聖総統の真意が透けて見える。

聖総統は、すぐに波動砲を撃たないヤマトに業を煮やして五分という刻限を切ったのだ。本当は波動砲を撃って欲しいのだ。

ヤマト側では混乱していた。

ここで敵母星を破壊することは外交上求められる問題であったが、イスカンダルの遺児サーシャの安全確保も外交上求められる問題だったからだ。

「あのボタンを押されたら、地球人は全滅か……これ以上、手も足も出ないじゃないか……」島は焦っていた。

「艦長! どうしたら……!」古代は振り返ったが。そこにいるのは沖田ではなくメカ山南だった。

「あ、ユキじゃないか!」太田が叫んだ。パネルに森雪が映っていた。

「ユキ」古代が叫んだ。一同もどよめいた。

「山南艦長、地球防衛軍司令長官からのメッセージをお伝えします」森雪は言った。

「うん」

「長官を初めとして、地球の有志は、地下に潜って抵抗軍を組織し、戦ってきましたが、ようやく、重核子爆弾の占拠に成功しました」

「それで現在地球の起爆装置は？」

「解体できました」

「うん」

それから森雪は表情を変えた。

「あのう……古代くん！」

「ユキ！」

「……古代くん！」

「帰るよ、きっと」

その通信を傍受した聖総統は笑った。

「解体しただと？ 愚かな地球人め、起爆装置はこちらにあるのだ」

そこにサーダが来た。「聖総統！ サーシャが起爆装置との回路を破壊して、姿を消しました！」

「何?! すぐ修理にかかれ！」

起爆装置が生きていないとヤマトを恫喝できない。

ヤマトのパネルにデザリアムに残ったサーシャが映った。

「サーシャ！」真田が叫んだ。

「重核子爆弾の起爆装置を切りました。でも、わずかな時間しかありません。突入してください！ 攻撃するのは今です！ 急いで!! 今から南極の入口を開けます」

「艦長っ！」島が判断を仰いだ。

「これより南極へ突入する！」山南が宣言した。

「ヤマト発進っ！」島がレバーを倒した。

物事は聖総統の思い通りに進んでいないにも関わらず、皮肉なことに、聖総統の計画通りにヤマトは内部に突入しつつあった。

聖総統はマイクに叫んだ。「全要塞に告ぐ。全要塞に告ぐ。ヤマトを撃滅せよ！ 生かして帰してはならん！」

これは音声コマンドで操作されるロボット兵器への指示だった。

ヤマトはトンネルを抜けて人工都市に迫った。

「あれだ」古代は言った。「あれが人工都市か」

しかしミサイルが飛んできた。

「島、回避だ」

「了解」

しかし、攻撃が激烈で回避しきれなかった。

「これ以上の回避は危険だ」メカ山南が言った。「古代、波動砲発射用意」ある意味で、メカ山南初の主体的な判断とも言える。

今すぐ波動砲を撃つ以外に問題を解決する方法は残っていないのだ。

サーシャを巻き添えにしてしまうことは、この際主要な問題ではなかった。サーシャが生き残ってヤマトが沈むという選択肢は山南に与えられていなかったからだ。

しかし、皮肉なことに第1艦橋後部への被弾が山南に致命傷を与えた。

「艦長！」古代が駆け寄った。「しっかりしてください。艦長！」

「艦長」一同も叫んだ。

「何をしておる。部品の一つが壊れただけだ」山南は言った。メカ山南がロボットに過ぎないと知らない者達は、自分すらもヤマトを構成する部品と言い切る山南の冷徹さに恐れ入った。しかし、実態は違う。機能が停止するほど破壊されたパーツはメカ山南の中で一つに過ぎないと言っているのだった。しかし、作戦行動中の宇宙戦艦内での修理の見込みはなかった。指揮継続は無理だった。

「ヤマトは死なん」山南は言った。傀儡のメカ山南が不在でもヤマトは機能するという意味だった。

「山南艦長！」古代は叫んだ。

「古代、代わって艦の指揮をとれ」これが山南最後の指示だった。

「分かりました。艦長」

「……ああ、青い地球が見える……一足先に、帰ってるぞ、古代」

「艦長!」

【一足先に、帰ってるぞ】という宣言は、機能停止に陥った身体を放棄して意識データを地球のコントロール・センターに戻すという宣言だった。青い地球が見えるとは、単純に戻し先を青い地球に定めたという意味しかなかった。

しかし、多くの者はそれをいまわの際の壮絶な遺言と理解した。

古代進もそう理解した。

メカ山南は、思考が硬直的ではあったが、逆説的に人間が硬直してしまうタイミングでも行動できる自由さも持っていた。古代進には、少しメカ山南に依存している部分があったのも事実だ。

だからこそ、メカ山南の喪失は古代進の感情を揺り動かした。

反射的に戦う必要を感じ取って、波動砲を用意した。

「くそー。だーっ。波動砲発射用意。対ショック対閃光防御。目標、人口都市中心部。発射一〇秒前、九、八、七……、六、五……サーシャ、四、三、二、い……。うう」

しかし、カウントダウンしているうちに自分が撃とうとしているものの正体を思い出した。

あれは、まだサーシャが残留している人工都市ではないか。しかも、無関係の一般市民がたくさんいるのかもしれない。彼らを一気に殺して良いとは思えない。

それが古代の決断を鈍らせた。

「俺が撃つ!」真田が叫んだ。「どけ、古代」

この時の真田と古代の行動の差は、要するにサーシャが死んでも意識が残留すると知っている真田と、知らない古代の差だった。最高の見せ場で死ぬことは、サーシャが産まれた時から決まった運命だった。それを知っている真田は、育てた娘への愛情ゆえに撃たねばならないと思った。

しかし、そんなことは知らない古代進は単純に撃ちたくなかった。

「うう」古代は波動砲の発射トリガを抱え込んで真田に渡さなかった。

「古代、お前はいいやつだよ」真田は言った。「たとえ、血はつながって
いなくても、サーシャは真田藩だ！ わずか一年でも親として育てた。俺だ
ってお前以上につらい。わかってくれ」

確かにその通りだった。

イスカンドルの運命がサーシャの死を求めているが、イスカンドル人
ではない真田には関係なかった。そして、育ての親としての愛情が真田にも
あったのだ。

その時相原が叫んだ。「サーシャ！」

パネルにサーシャの姿があった。「何しているの、おじさま。早く、波動
砲を……」

「そんなことができると思うのか、サーシャ」

「地球の重核子爆弾は、もうすぐ動き出すわ。私ごと撃たないと、この
危機は脱けられないのよ」

当然の指摘だった。

しかも切実だった。

このまま殺されては、サーシャの命を張った行為は全て無駄になる。

サーシャは無駄死にだ。

それはイスカンドル人の運命云々以前の問題として、人として許容でき
ることではなかった。その古代の迷いはサーシャを追い詰めつつあった。

しかし、サーシャの中に芽生えたのは古代を恨む気持ちではなかった。
単純に、自分が愛されているという気持ちだ。

そして、古代は良い、地球人は良いと思う気持ちも生まれた。

イスカンドル人の運命という大きな決まり事の枠組みしかスターシャは
語ってくれなかった。しかし、古代はもっと豊かな情感でサーシャを包ん
でくれるではないか。

運命を受け入れるだけでは愛は実らない。

かつて、森雪がスターシャに言ったアドバイスは皮肉だった。

サーシャには、運命を受け入れないという選択肢もあったはずだ。

かつてスターシャが選んだようにだ。

だが、それは手遅れだった。

サーシャには、もはや運命を受け入れる以外に選択肢はなかった。

だから、古代進への感謝の気持ちとは裏腹に、こう言わざるを得なかった。

「おじさま、こうなることは、わかっていたわ。私はあなたのお役に立って死んでいけることを喜んでいるわ」

そのとき、うなり声を上げながら聖総統がサーシャのいる部屋に入ってきた。

「サーシャ!」古代は叫んだ。

「おじさま早く! さもないと、聖総統に北極の脱出口を閉められてしまいます!」

サーシャは悲鳴を上げた。

聖総統に撃たれたのだ。

「サーシャ!」古代は叫んだ。「畜生っ! サーシャ!」

古代は波動砲の引き金を引いた。

しかし、一般市民が残っていても巻き添えにして良いという判断ではなかった。実は警備兵すらおらず、聖総統自らサーシャを撃ちに来たことから、古代は実際にここにいるのは聖総統とサーダだけだと判断していたのだ。この二人は偽地球を演じた悪党であり、死は止むを得ない。けして、感情的に逆上して撃ってしまった……というわけではないのだ。

結果として二重銀河全体を吹っ飛ばし、数え切れない人命を一瞬で消し飛ばしたことは皮肉な結末だ。

だが、それは古代進の意図ではなかった。

聖総統が悲鳴を上げて崩壊し、デザリウムも爆発した。

ヤマトは爆発に追いつかれそうになった。

「ワープ!」古代はワープを命じた。

驚いたことに、ワープするヤマトに匹敵する速度で二重銀河の崩壊は進行した。つまり、超光速で破局は伝播した。自然に起こる現象ではない。

聖総統が用意した銀河規模の爆破ネットワークにヤマトの波動砲が点火してしまったのだ。

ヤマトは二重銀河を遠く離れてやっと落ち着くことができた。

外部から二重銀河を見ているヤマトは、二重銀河の崩壊と、それに伴う新銀河の誕生を見る羽目になった。光すらも超光速で伝播し、即座に行為の結果を見ることができたのだ。もちろん、光は真空中なら光速で進む。超光速はあり得ない。この時、光子のワープが発生していたが、それはサーシャが用意したささやかなサービスだった。つまり、サーシャが死に際して残したものをヤマト乗組員に見せるというサービスだ。

「見ろ。二重銀河が崩壊して、新しい銀河が誕生していく」真田が言った。それを理解した真田だけが、それを見る価値のあるものと理解して一同に見ることを促した。

それを見ながら古代は理解した。

幾多の生命をたたえた銀河を自らの手で滅ぼし、そして新しい銀河を創造してしまったのだと。それは神にも等しい行為だった。だが、古代には誇れなかった。古代は誰も死なない結末が最も良いとっていて、特にサーシャには死んで欲しくなかったからだ。しかし、サーシャの死を防げなかった上に、二重銀河まで崩壊させてしまった。

古代はまさに自分の手が血まみれであることを思い知った。

「人間は、いつになったら血を流さずに幸せになれるんでしょうね……サーシャも救えなかった。残ったのは、俺の血にまみれた手だけだ」

古代の言葉は、「サーシャを」ではなかった。

「サーシャも」だった。

確かにサーシャは大切だ。

古代進の【私】の部分の最大関心事だったと言って良かった。

しかし、古代進の持つ誇大な理想主義は常に【公】の部分を抱え込む。

だから、古代進の心は【公私】の両輪で動いていた。

だが、古代進の【私】の部分はサーシャの死を阻止できずに傷つき、【公】

の部分は二重銀河の大多数の生命を、有無を言わず滅ぼしてしまった事実に対して傷ついていた。

それが、【血まみれ】発言につながるわけだ。

もちろん、地球侵攻に賛成する民意を形成したのなら報復されて当然という考えもあるだろう。

しかし、二重銀河の全生命がその意志決定に参加したとも思えない。

古代が具体的に言えた名前はサーシャだけだ。あとは【サーシャも】という形でその他の人たちに言及するしかなかった。

だが、名前に言及できないからと言って、罪の意識を持たずに済むわけでは無かった。

その時、古代は信じられない言葉を聞いた。

死んだはずのサーシャの声だ。「いえ、あなたを責められる人は、この世にはいないわ」

「サーシャ!」

宇宙空間に死んだはずのサーシャが浮かんでいた。

死者の意識を現世にとどめ、姿を投影するイスカンダルの技術だった。

古代進はその技術について良く知らなかったが、過去にスターシャを見たことがあるし、既にサーシャが死んでいることは明らかだった。

古代進は死者との対話を受け入れざるを得なかった。

サーシャは言った。「あなたは今、自分の罪を知っていらっしゃる。血を流すことの恐ろしさを感じていらっしゃる。その思いは、すこしずつ積み重なって、今はだめでも、きっといつか、命を大切にできる人類を作りあげてください。私のことは、どうかご心配なく。私はむしろ感謝しています。短かったけれど、私の青春は、とても幸せだったんですもの。その幸せを教えてくださいましたのは、ススム、あなた……」

サーシャの評価はいささか古代進寄りでありすぎた。つまり、身内に甘い評価だった。あるいは、愛した男に甘い評価だった。だから、罪を責めるよりも、罪を知っていること望ましいという話になっていく。そもそも、サーシャの青春は幸せだったのかも疑問符が付く。結局、サーシャは古代

進が胸の中で育てた森雪という虚像には勝てなかったのだ。しかし、自分のために最後の最後で波動砲発射をためらってくれたという小さな勝利感があった。その勝利感が、古代進に好意的な評価に直結していると言っても良かった。

つまり、試合は3対1で森雪に負けたが、終了直前にシュートを叩き込んで一矢報いたサッカー試合のようなものだった。最後の最後で見せ場を得られてサーシャは満足だった。試合に負けて勝負には勝ったのだ。

しかし、負けた以上は退場しなければならない。

現世に残存した死者は、不必要に生者と接触はできないのだ。

良い印象を残すには、怨みを言うよりも肯定的な評価を口にする必要があった。

そして、サーシャは自らのイスカandal人としての義務を果たそうとした。つまり、人々から末代まで語り継がれる恩人として消えていくのだ。

そのためには、行わねばならないことは二つあった。

まずは、育ての親へのお礼だった。

「お父様、仮の親となって、私を育ててくださって、本当にありかとうございました。私は、この宇宙で、地球がいちばん美しい星だと思います。それは、人と人とが、信じ合って生きているからです。その美しさを、もっと大きく育て、永遠のものとしてください。そのために私もちょっぴりお役に立てて、こんなに嬉しいことはないわ」

この言葉には少し深い意味がある。

それが真田には理解できた。

地球人が互いを信じ合っているという事実はない。

それはサーシャ自身も分かっていたことだ。

もし本当にみんなが信じていたらサーシャに真田濤という名前は名乗らせない。

だが、立派で尊敬に足る人間が多く、信頼関係を結びうる可能性が高いのが地球……、という意味では肯定的に評価して良かった。そうで無ければ最初からイスカandalは救いの手を差し伸べたりはしない。

表面的には美しく、そして真田には理解可能な裏の意味を込めた間接話法のサーシャの言葉だった。

そして最後に全ての人に対してサーシャは挨拶を行った。

「これから、私は胸を張って、お父様、お母様のところへ参ります」
それから目の前にいるヤマト乗組員に告げた。

「さようなら、ヤマトのみなさん」

最後に私的な我が儘を追加した。

「さようなら、古代進、私のすてきな若い叔父様」

そして、投影されたスターシャのところにサーシャは去って行った。

「サーシャがお母さんのところへ帰って行く……」島が言った。

古代守の姿はなかった。

そしてスターシャとサーシャの姿は小さな光る点になって消えた。

古代進は、自分が見たものが現実だったのか何か幻を見たのか分からなくなった。

幻なら「島、おまえも見たか?」と質問するのもはばかられる。

古代進は考えた。

彼自身が最も実行したかったのはサーシャの遺体の搜索だ。

しかし、それはほとんど不可能に近かった。

サーシャが死んだデザリアムの正確な位置は分かっているとはいえ、ここには、まだ生まれたばかりの若い星々しかない。そこを航行するのはいくらヤマトでも危険すぎた。しかも、あの爆発ではよほど運が良くても細胞のカケラぐらいしか回収できないだろう。

その上、ヤマトのエネルギー残量も乏しく、損傷も大きかった。乗組員の疲労も大きかったが、死者、負傷者も多かった。

しかも、地球は彼らの帰りを待っている。彼らが暗黒星団の母星と母銀河と重核子爆弾のスイッチを破壊したとしても、地球の彼らが無力になったわけではないのだ。地球の人たちはヤマトの助けを必要としている。

これ以上、ここに留まるのは困難だろうと古代は判断せざるを得なかった。

しかし、一度決断してしまうと後悔は無かった。

やはり古代は森雪が気になったからだ。いつまでもパルチザンとして戦わせることはできない。

「ヤマト、地球に向けて、発進!」

古代は命令を出した。

どの部署からも文句は出なかった。

古代は、新乗組員達からも信頼される名実共にヤマトの艦長代理となっていた。

その時、スターシャとサーシャの計らいで展開されたのは、幻の世界の中を再会する古代進と森雪の姿だった。

本当の古代はまだ第1艦橋にいるし、本当の森雪は地球でヤマトの帰りを待っている。

しかし、幻では既に再会して抱き合っていた。

これはサーシャのメッセージだった。

森雪には負けを認めるから、いつまでもお幸せに暮らさない。他の女に浮気をしてはダメよ、ということだ。

そして、彼らが消えると、最後は懐かしい人たちの姿が投影された。

死者の意識が保存されていたわけではない。

ただ、懐かしい姿をオレンジ色の光で投影しただけだ。

沖田が。

太助の父の徳川が。

土方が。

斉藤と加藤四郎の兄、加藤三郎が。

そして、スターシャ、サーシャ、古代守が。

もっと多くのオレンジの人たちが集まって古代とヤマトの勝利を祝福した。

スターシャ、サーシャ、土方、尽力のあった地球人2名、徳川、沖田、荒米、斉藤、古代守、加藤三郎。

古代は、これがスターシャ親子からの最後のご褒美、プレゼントである

と理解した。

たぶん、もう彼らは古代進の前に姿を現さない。

永遠に。

第5章 推理

全ては終わった。

そのはずだった。

ヤマトの修理を指揮してやっと部屋に戻った真田は身体をゆっくり横たえた。

地球に戻るまでには一通りの応急修理が終わりそうだった。

これ以上は本格的なドック入りが必要だろう。

それがいつになるのかは分からない。

ピケットラインにいた有人艦隊主力は、地球が占領された時点で全面的に降伏して艦艇はそのまま敵の手で爆破されていた。その結果、現在稼働できる有力な大型艦の数は極めて少なく、ヤマトが暗黒星団の残存抵抗勢力との戦いから解放される日はまだ見えていなかった。また艦隊を再建しなければならぬが、おそらく次は無人艦隊を前提にした整備計画は立てまい。

その時、真田に呼びかけてくる者がいた。

「死んだ後までおまえに迷惑をかけるのは済まないと思っている」

真田が飛び起きると古代守が立っていた。

もちろん、意識を持った死者の虚像だ。

「古代。おまえか。もう姿は見せないと思っていた」

「まあ確かに意識を残留させた死者にもいろいろ厳しいルールがあつてな。生者の前にはみだりに出られないのも事実なのだ」

「待て、それより古代進に会いに行け。きっと弟も喜ぶ」

「ダメなんだ、真田」

「ダメなことがあるか。オレに会いにヤマトに来た以上、同じ艦内の弟に会えない理由があるか」

古代守は頭をかいた。「実は会えない理由があるんだ」

「なんだと？」

「死者は特別な事情がない限り生者と会ってはならない。これが死者のルールだ。だから、進には会えない。彼は生きているからね」

「なら、俺と会うのも不味いだろう」

「それはいいんだ」

「どうして」

「身体の一定以上の割合が機械になっている者は生者と見なされないから」

真田はため息を付いてソファに座った。

「なるほど。オレの手足は作り物だから生者にカウントされなかったのか」

「東西暗黒星団帝国の皆さんも首から下は機械だから生者にカウントされていない」古代守は説明した。「死者のグレート・エンペラーが西暗黒星団帝国を支配できたのもそれが理由だ」

「おや。私の話をしているのなら会話に混ぜてくれないか」

グレート・エンペラーの声が聞こえた。

彼は自分の姿を投影することができないが、声は出せる。

「もっとも」とグレート・エンペラーは言った。「西暗黒星団帝国を支配したのも既に過去の話だ。あれはもう消えてしまった」

「グレート・エンペラー、まだ私に何か用かね」真田は言った。「サーシャが死んで帝国も消えてしまった以上、もはや私とグレート・エンペラーのささやかな同盟関係も終わりだろう。見守るべき娘も国も、もうないのだからね」

「その通りだ。しかし私は別の課題を抱え込むことになった」

「なんだね？」

「私の帝国を消したのは誰かという問題だ」

「なるほど」真田はうなずいた。

「どういうことだ？」古代守が首を傾げた。

グレート・エンペラーが説明した。

「二重銀河には、あちこちに銀河破壊用の高性能爆弾が設置されていた。東暗黒星団帝国の連中が自分の版図で勝手にやっていたことなので、こちらからは手出しできなかつた。しかし、それらは簡単に点火して爆破できるものではない。爆破するための起爆剤として用意されたのがデザリウム
の水晶都市だ。ヤマトが波動砲を撃ったことでそれは爆発し、連鎖的に設置された全ての銀河破壊用の高性能爆弾が炸裂して二重銀河は消滅した」

「それで問題はなんだ？」古代守は質問した。

「爆弾とデザリウムを設置した東暗黒星団帝国、波動砲を撃ったヤマト、起爆装置へのゲートを開いたイスカンドル人、誰が二重銀河の崩壊の引き金を引いた張本人なのかね？」

「なるほど」真田はうなずいた。「同じような疑問は我々も抱えている。我々は単に重核子爆弾のスイッチを破壊できれば良かった。二重銀河を崩壊させる必要などなかった。どこで間違ったのか」

「真田もか」古代守が頭を抱えた。

その時、更に別の人物が訪問してきた。

もちろん死者の投影だ。

「面白そうな話をしているな。私も混ぜてくれるかな？」彼は言った。

「あなたは？ いや見た記憶がある」真田は考え込んだ。

「2402年の地球で対面したではないか」彼は言った。「おっと、あのときは変装していたのだったな」

「思い出しましたよ、聖総統。素顔は通信パネル経由で拝見しています」

「まさかこのような形で東の支配者と相まみえる日が来ようとは」グレート・エンペラーがため息を付いた。

「だが、東暗黒星団帝国も既に存在しない。二重銀河崩壊に伴って消えてしまった」

「確かに」

「どうしてこうなったのか。その理由は私も知りたい」聖総統は言った。

真田はうながした。「聖総統がお考えの疑問についてお聞かせ願えます

か?」

「我々の作戦は簡単だ」聖総統は説明した。「未来の地球を偽装してヤマトを無力化するのが基本作戦。乗ってこない場合はグロデーズ艦隊とデザリアムの装備でヤマトを撃沈すれば良いこと。水晶都市に波動砲を撃たれることは想定外だ。まして、それによって二重銀河が崩壊するなど、作戦の想定外でありすぎる」

「すると、扉を開いたイスカンダル人サーシャが黒幕であると?」

「最初はそう考えたが、それでは筋が通らない。イスカンダル人は、二重銀河が崩壊しても何も得る物がない」

「では誰が二重銀河崩壊の黒幕だと?」

「西だと思っている」

「西暗黒星団帝国? しかしなぜ? 西暗黒星団帝国も消えてしまうというのに?」

「西暗黒星団帝国も消えるが、死者であるグレート・エンペラー本人には痛くも痒くもない。もともと死んでいるのだからね」

「なるほど。聖総統もこうして意識を残した死者の仲間入りをしているが、命は失ったわけだ」

「そうだ。もはや美味しいものも食えないし、女も抱けない。もともと死者のグレート・エンペラーとはそこが違うのだ」

真田はため息を付いた。「それで、一緒にいた女性はどうしました?」

「あらゆる雑用をこなすために製造したサーダタイプの支援人間だな。もちろん死んでも身の回りの世話をさせるために意識を残留させてあるぞ」
聖総統が腕を振ると彼の後にサーダが出現した。これも死者の投影だ。

「サーシャに少し似ている部分があるな」古代守が感想を言った。

「守は初対面か」真田は言った。「おそらく同じ設計から作られた人造人間の亜種派生形だろう。サーシャの場合はスターシャと守の遺伝子が入っているから純粋な人造人間では無いがね」

「サーシャと同じ設計だって?」守が目を丸くした。

サーダは一步前を出た。「薄々は察していましたが、死んでから事情は詳

しく知りました。こういう事情さえなければ、姉妹のように暮らすこともできたでしょう」

「今からでも遅くない……と思うよ」と真田は言った。「イスカandal人の一部は思想の違いから袂を分かって暗黒星団帝国を建国して、その結果として姉妹モデルがどちらでも製造された。しかし、そんな事情は君たちには関係ないだろう」

「ですが聖総統は……」

「統治すべき土地のほとんどを失った彼は、まだ聖総統なのだろうか」

「それは……」

「聖総統と呼ばれる男がここに残っているだけではないだろうか」

「……」

「一つ提案しよう。サーダさんは、一度スターシャ、サーシャとゆっくり話し合ってみたらどうだろうか」

「賛成だ」と突然聖総統が言った。「いや厳密に言えば、私もスターシャとゆっくり話がしてみたい」

「オレは気が進まないな」と古代守が言った。「スターシャを彼に会わせるなんて。何が起こるか分からない」

「大丈夫ですよ」スターシャがサーシャを従えて出てきた。

「おお、これがあの名高いスターシャ本人か」聖総統は感心していた。

「参ったな。これで関係者全員集合かな」真田は頭をかいた。

「二重銀河崩壊に関与した四勢力、地球、イスカandal、西暗黒星団帝国、東暗黒星団帝国の代表が集まったのだ」聖総統は言った。「決着を付けるべき好機だろう」

「私は地球代表でも何でもないよ」と真田は言った。

「地球の知性を代表していることはオレが保証する」古代守が誇らしげに真田の後に立った。

「やれやれ」

「ここは真田の推理ショーを期待して良いのだろうか?」とグレート・エンペラーも言った。「二重銀河崩壊の真相の推理ショーだ」

「確かに、状況はだいたい想像が付いているが……」

「では全員で聞こう」古代守は全員を座らせた。

人数分に椅子は足りないはずであったが、オレンジ色の椅子が出てきて数を充足させてしまった。

サーシャとサーダはおずおずと手を繋いで一緒に座った。

「そもそもこの地球侵攻は不可解なことだらけだった」と真田は言った。

「使う気のないハイベロン爆弾、奪う気のない肉体奪取計画、見逃された高速艇、撮影されているのに手出しされないヤマト発進、脆すぎるゴルバ型浮遊要塞群、あまりに下手な地球の偽装、明らかに手加減して撃っている無限ベータ砲、母星に配置されたあまりに少なすぎる人員」

「東のボンクラが考えそうな気の抜けた計画だ」グレート・エンペラーが呟いた。

「しかし侵攻計画は完璧だった。地球は一晩でほぼ制圧されてしまった。これは矛盾しています」

「何が言いたい？」聖総統が眉をしかめた。

真田は聖総統を睨み返した。「つまり、全ての経緯は緻密に計画されたものとしてそれを元に真の目的を考えて見たのだよ」

「馬鹿馬鹿しい。我々の住んでいた二重銀河の崩壊まで計画だということか？」

「その通り」真田は冷静にうなずいた。

「頭がおかしいぞ」

「二重銀河の崩壊は西暗黒星団帝国の陰謀だという説を言ったのはあなたの方ですよ。西暗黒星団帝国も二重銀河の住人だった。住人なら二重銀河を吹っ飛ばすはずがないという主張が正しいなら、あなたの西暗黒星団帝国黒幕説も成立しなくなる」

聖総統は黙りこんだ。

「そろそろ本筋に戻ってくれ」とグレート・エンペラーが言った。「東暗黒星団帝国が二重銀河を吹っ飛ばそうとしていた理由は何だね？」

「私がお説明します」とサーダが立ち上がった。

「サーダ。何を言い出す」と聖総統が狼狽した。

「私に組み込まれた古い遺伝子にイスカンドル王への忠誠を求める機能が含まれていました。女王ではなかったサーシャの出現でスイッチは入りませんでした。スターシャ女王の出現により、そのスイッチが入りました」

「そんな遺伝子、聞いておらんぞ」

「私自身も知りませんでした。今、スターシャ女王から教えられて初めて知りました」

「なんだとっ!」

聖総統には構わずサーダは言った。

「死んだ後で全て教えられました。どうしても西暗黒星団帝国に勝ちたかった聖総統が計画したのは、二重銀河崩壊という大災害に見せかけた西暗黒星団帝国抹殺計画です」

「しかし、自国民を巻き添えにしてまで得る勝利に意味があるのかね?」真田は質問した。

「はい。ですから、最低限の人員以外は疎開が前提でした」

「だが疎開など行われていない」

「疎開はカモフラージュされていました。西暗黒星団帝国に気づかれないうように」

「なんだと」グレート・エンペラーは絶句した。

「疎開先に選ばれたのは地球」と真田は言った。「そうですね?」

「はい。地球侵攻部隊の一部は本物の戦闘部隊でしたが、ほとんどは兵士に偽装した一般市民でした」サーダはうなずいた。「素晴らしい生身の身体を手に入れに行こう、というキャンペーンを打って一般市民を強制参加させました」

「つまり、生身の身体があるから地球に来たのではなく、疎開先に一般市民を送り込む口実として生身の身体と言っていただけだね?」

「そうです。事実として本当に生身の身体を欲しがった者達は極少数でした」

「腰を折って悪かった。話を進めてくれ」

「はい。疎開ともう1つ残された課題は爆弾への点火方法です。無限ペータ砲を使えば点火は可能でしたが、大艦隊が必要で、かつ聖総統は自分が二重銀河崩壊を引き起こした男として糾弾されることを望みませんでした。地球製波動砲で撃てば一発で良いと分かり、その方向で計画が練られました。地球人が撃った地球製の波動砲で二重銀河が崩壊したのなら、聖総統の責任にはならないであろう、ということです。次はどの船に撃たせるかですが、これは殊勲艦の宇宙戦艦ヤマトに決まりました。一隻だけ離れて配置されていて、わざと見逃しやすかったのです。次は、地球人に自発的に波動砲で点火させる方法を考えねばなりませんでした」

「なるほど」真田は言った。「ほとんど意味の無い市民殺戮やビル街の破壊を繰り返したり、使う気のないハイペロン爆弾を地上に降ろしたりしたのは波動砲を撃たせるためか」

「そうです。計画の第一段階は、地球を守る必要のある状態に置くことです」

「第二段階は？」

「地球を守るには母星にあるスイッチを破壊する必要があるという状況を作ることです」

「第三段階もあるね？」

「第三段階は、敵愾心を煽るために粗悪な模造品の偽地球を見せつけることです」

「ということは、聖総統自ら銃を持ってサーシャを邪魔しに行ったのも」

「波動砲を撃たねばならないというムードを後押しするためです。そもそもサーシャが生きると波動砲を撃たないかもしれませんが、波動砲を促す意味でもサーシャ殺害は必要とされていました。あの時点で水晶都市にいたのは聖総統と私だけでしたので、二人でサーシャを追い詰める以外に手はありませんでした」

「では確認のために質問しよう」

「はい」

「我々が波動砲で撃った水晶都市は、東暗黒星団帝国の母星ではなく、点火装置のカモフラージュだね？」

「そうです。地球という主張は偽でしたが、母星であるという主張も偽でした」

「母星が偽であることから目を逸らすための偽地球でもあるわけか」

「その通りです。あの偽地球で完全に騙せるとは考えられていませんでした」

「もし、我々が偽地球であると信じて永住を決意したらどうする気だったのかね？」真田は少し意地悪な質問をした。

「東暗黒星団帝国の兵士が地球人に偽装してヤマトに乗りこみ波動砲を撃ったでしょう」

「我々と撃った、と言うことかね？」

「そうです。証拠は残しません」

「ありがとう。よく分かった」

スターシャはサーダを抱きしめた。

それからスターシャは真田に向き直って言った。「では、一連の出来事の黒幕は東暗黒星団帝国で、地球もイスカンドルも上手く利用されただけ。真の標的は西暗黒星団帝国だった……という解釈でよろしいかしら？」

「スターシャ閣下はいつから気づいていましたか？」

「真田が指摘したことのうち、いくつかは気づいていました。ですが、黒幕までは分かっていませんでした。夫が自爆したので気が動転していたのでしょう」

「事前に知らせないで自爆して済まなかった」と古代守はスターシャに謝った。

「良いのです。そのおかげで、処刑された捕虜ではなく、英雄として名を残せたのです。ほんの数分の寿命差でそれなら悪くない取引でしょう」

そこでグレート・エンペラーが咳払いした。「では東暗黒星団帝国の勝利で話はおしまいかね？」

「まさか」真田は笑った。「彼らにも誤算がありました」

「誤算とはなんだね？」

「おそらく、ゴルバ部隊の壊滅、大中間補給基地の破壊です」

「なぜ誤算なのかね？」

「私のカンが正しければ……」真田は言った。「ゴルバと大中間補給基地は移民船の中継ステーションだったはずですよ。それらが失われたことで、大多数の移民船は地球にたどり着けず、宇宙の藻屑になったはずですよ。どうでしょう、聖総統」

「ふん。認めてやる。事実だ」聖総統は言った。「たった二つの中継拠点をヤマトに潰されて、我が国民の九割以上が死んだか、今まさに死につつある」

「その割にあまり悲しそうには見えませんね」

「西さえ片付けば、私自身と地球占領軍の精鋭でいくらかでも国家の再建は可能だ」

「死んだ国民に対する弔意は？」

「死んだ者はもうどうでもいい」聖総統は言い放った。

「その言い方はいくら何でも……」グレート・エンペラーは絶句した。スターシャも何も言わなかった。

とても国家元首の言い分ではなかった。

「残念ながら」と真田は言った。「それは無理だ」

「なぜだ。かなりの戦力を失ったが、それでもまだ我が軍が圧倒的に優勢だ」聖総統が言った。

「どうでしょう」

「ハッターリを言っても無駄だ。地球の大型艦は全て爆破させた。地球連邦軍に残存している大型艦は爆弾が不発だったことで残った僅か二隻。ヤマトが戻っても三隻にしかならない。それに対して、我々には十隻以上の大型艦が残存している」

「確かにその通り。私以上に正確な数をご存じらしい」

「では間違いを認めるのだな？」

「いえ。その話は、残存した大型艦があなたの指揮下であればの話です」

「下らん。我が軍の兵士は命令への絶対服従を徹底してある」

「だが絶対服従には例外条件があるはずだ」

「確かに例外はある。戦闘を継続しても無駄な消耗になるだけなら、降伏することも認められている」

「さっき連絡があった。在地球の地球占領軍の大半は降伏と武装解除を申し入れたそう。戦闘を継続しても無駄な消耗になるだけだと彼らは判断したようだ」

「確実に勝てるというのに、なぜ無駄だと」

「バルチザンとの消耗戦で疲弊した地球占領軍は、もはや移民も来なければ増援も補給もないと無い上に戻るべき故郷すら無くなったと知って戦いは全くの無駄だと悟ったそう」

「待て、確認してくる」

しばらく聖総統の姿が消えた。

数分後に聖総統の姿が部屋に戻った。「私も降参だ。全て真田の言った通りだった」

「聖総統の誤算は、地球占領軍は計画通りに待っていると思ったことだ」真田は言った。「しかし、計画外のことが多く起きすぎた。彼らが計画通りに振る舞う可能性はほとんど残っていない」

「実は自分にも大きな落ち度があったことにやっと気づいた」聖総統はため息をついた。

「それはいったい？」

「大多数の兵士は二重銀河の崩壊が計画されたものだと知らない。情報統制を敷いたせいだ。その結果、故郷の消滅に衝撃を受けて戦意を失ってしまった。それは予定通りの結末だというのに」

「情報統制を上手くやり過ぎましたね」

「真田はいつ全貌が分かったのだ」

「漠然とした疑惑なら最初から。ある程度根拠のある疑惑になったのは、あなたがたが上映したヤマトの歴史を見たときです。イカルスからの発進映像は誰もあのアングルからは撮れなかったはずだ。しかし映像があった。

ステルス偵察機からこっそり撮ったとしか思えない。地球人はそんなことをする必要が無いので、暗黒側だ。つまりヤマトの所在を掴んでいたのに攻撃してこなかった。これは、裏がある証拠だ。しかし、個別の話はともかく、計画の全貌がおおむね分かったのは二重銀河崩壊後になってしまったがね」

「確かに噂通りの切れ者だ」聖総統はシャッポを脱いだ。

スターシャが拍手した。「お見事です、真田」

「それはどうも」

「良い話と悪い話、どちらを先に聞きたいですか」

「では悪い話を」

「地球では降伏した暗黒星団帝国兵士を無人の惑星に移住させる相談が既に始まっています。その実行組織の長官に真田が内定しつつあります」

「はて、なぜだろう」

「敵母星にまで行き、暗黒星団帝国人を直接見てきた少数の人間の中の一人だからですよ」

「なるほど。指紋が無くても慌てない人材ということか」真田は自嘲した。

「かなり忙しくなりそうです」スターシャは言った。

「止むを得ない。条件次第では引き受けよう。もしかしたら二重銀河崩壊の引き金になった波動砲は私自身が撃っていたかもしれないのだ」真田はうなずいた。

「移民が一段落するまで、ヤマトに触れる機会がなくなるかも知れません」

「止むを得ない。では良い話とは？」

「東西暗黒星団帝国の壊滅に伴って新しい敵が勃興しそうです。しばらく先の話になりそうですが、ヤマトはまた必要とされるでしょう」

「スターシャ閣下、それが良い話ですか？」真田は苦笑した。

「あなたには良い話だと信じます。あなたの願いはこうですね？」スターシャは言った。「ヤマトよ永遠に」

エピローグ 永遠

語り部エヌは、語り終えた。

「おはなしはこれで終わりだ」

「うそー。永遠に続かないの?」

「永遠に続く物語とは、終わりの無い物語ではないのだよ。終わりとは始まりのサイクルを繰り返す物語のことを言う」

「じゃあ、次のサイクルを始めてよ!」

「ダメだ。坊や達はもう眠る時間だよ」

「じゃあ僕は夢の中で続きを見る!」

「そうだそうだ。そのまま夢の世界で永遠に続くヤマトの夢に浸るのだ」

語り部エヌは布団に布団に入った子供達の頭を撫でた。

そして、スッと空中に溶けるように姿を消した。

終わり

解説

本作のオリジナル部分がなぜこのような設定になっているかおおまかな部分を説明する。

ヤマトよ永遠にの最大の問題は、暗黒星団帝国の振る舞いに非常に鮮やかな部分と、子供じみた無能な部分が共存していることだ。たとえば、地球防衛軍に気づかれないで三脚戦車を上陸させる手際はあまりに見事だ。しかし、不自然に「我々の文化」を強調する聖総統はあまりにも違和感がある。上手く騙そうとしているのではなく、まるで敵対心を煽っているようだ。

そこで、不自然な部分は【真の意図を秘匿する欺瞞情報である】と解釈することにした。

次は、真田が一目見ただけで「ハイペロン爆弾だ」と断言してしまう不自然さだ。しかし、正式名称までは当てることができなかった。そこで、真田に対する情報提供者が存在したという設定を与えることにした。だが、

その情報提供者はその兵器のアウトラインの情報を与えることはできるが、正式名称までは与えられない存在でなければならない。

そこで、浮上したのが、【新たなる旅立ち】の暗黒星団帝国と、【永遠に】の暗黒星団帝国は似て非なる兵器を持っているという事実だ。そこで、この2つの暗黒星団帝国はもともと一つであったが今は分裂した帝国であると設定した。情報提供者はその片方の人間であり、爆弾についての情報を提供できるが、もう片方の帝国で実際に作られた爆弾の名称までは分からないと設定した。

しかし、暗黒星団帝国の人間が真田に気軽に会いに来て情報を提供しては不自然だ。そこで、死者の意識が残存して生者と会話可能という設定を導入した。死者が意識だけで訪問してくるのなら、不自然ではないからだ。問題は【誰の意識か】【なぜ真田を訪問するのか】【なぜ意識を残せるのか】ということだが、これはグレート・エンペラーとした。理由は、生身の身体で登場していないからだ。しかし、それだけではわざわざ真田を訪問する理由がない。そこで、暗黒星団帝国もイスカンダルと祖先を同じくするという設定を追加し、サーシャの遺伝子の一部がグレート・エンペラーのものという設定を行った。つまり、真田を訪問する理由はないが、サーシャを訪問する理由はあり、そこで真田と同盟関係を結ぶわけである。そして、【暗黒星団帝国もイスカンダルと祖先を同じ】という設定は、イスカンダル人も暗黒星団帝国人も死後に意識を残せる共通性の根拠になる。

以上の設定を、西暗黒星団帝国、東暗黒星団帝国としてまとめた。二重銀河には二つの帝国が存在するわけである。

そうすると、二重銀河の崩壊に伴って双方の暗黒星団帝国がどちらも滅んだことになる。そこから逆算して、地球侵攻の真の意図は二重銀河ごと西暗黒星団帝国を滅ぼすことにあると設定した。地球人類の生身の身体ではない。生身の身体を求めてきたというのは、真の意図を秘匿するための欺瞞情報とした。これで、【生身の身体を求めてきた割にぜんぜん地球人の身体を奪わない暗黒星団帝国】という矛盾も解消できる。

次は、【成長が早すぎるサーシャ】【サーシャの死に急ぎ】という問題だ。

これは、セットで解決した。1年で大人になり1年で老いさらばえて死ぬという設定を導入した。生きるのも死ぬのもワンセットで急ぎすぎなのだ。これがサーシャに与えられたイスカンドルの運命となる。

艦長山南に関しては、死ぬ際の「部品」発言が問題だ。人を育てる教育者が、人を交換可能な部品扱いするような言い方をするのか疑問なので、そこで筋を通すためにメカ教官であるという設定を導入した。更に、便宜上の艦長を立てる必要があるという設定を入れることで、古代が艦長にも代理にもならない問題を解消させた。

もう1つ、古代守の自爆問題もある。身体検査を受けているであろう古代守が爆薬を持っているはずもなく、自爆できるのは妙だ。そこで、真田と同じく機械の身体だったという設定を導入した。

サーシャとサーダの名前が似すぎている問題も、イスカンドルと暗黒星団帝国の祖先が共通という設定で処理した。

暗黒星団帝国の母星が、【暗黒】と名乗っているのに暗黒銀河ではなく白色銀河側に存在する矛盾を解消するために、【本物の母星ではない】という設定を導入した。本物の母星ではないから、聖総統とサーダ以外に、誰も人が出てこないのだ。

さて、おおまかな説明は以上で終わるのだが、大まかな目標について最後に説明しよう。

それは、全ての台詞を無修正で温存しながら可能な限りの矛盾した展開を除去することを試みることだ。プロはリメイクに際してそういうことはしないので、これはまさに【ここだけの作品】になるだろう。それを実現する際、カットされた台詞は全て無かったものとして扱った。カットされた台詞の多くは情報として調べることはでき、それらを踏まえることで矛盾の多くは解消できるのだが不十分であるのであえて採用していない。

結局残ったのは古代の血にまみれた手ではなく、四勢力が複雑に絡み合っていて誰が二重銀河を崩壊させたのか分からない混乱状況であり、それを収束させるのは波動砲ではなく真田の推理ということになった。

本作最大の収穫は、映画中で上手く活かしていたとはいいがたいサーダ

に見せ場を創出できたところだろう。

それから、ヤマトよ永遠にの構造的な弱点も把握できた。それは、本題に入るまでの時間が長すぎるのだ。本当ならヤマト、サーシャ、アルフォンはもっと早い段階で登場しているべきだった。その結果、上映時間 145 分の割と長い映画でありながら、ヤマト、サーシャ、アルフォンについての語りが食い足りない結果になっている。時間経過を意識しながら映画の流れを再認識できたのも大きな成果だ。

2017/03/16 Tohno Akihiko

宣伝

- [小説・推理サイボーグ・真田の事件簿・8 作合本【Kindle 版】発売中。](#)
その他は[遠野秋彦作品全リスト](#)参照！